

第1回

胆のう造影研究会開催概要

会 期：1965年11月

会 場：千葉市

当番世話人：窪田博吉
(千葉大学医学部第1外科)

参加人数：約30名

演題総数：5題



開催内容

主題

1. 胆管穿刺造影法
症例検討 5題

第2回

胆のう造影研究会開催概要

会 期：1966年8月6日(土)

会 場：東京

当番世話人：高山欽哉
(丹羽病院消化器科)

参加人数：約100名

演題総数：17題



開催内容

主題

1. 直視下胆のう穿刺法
話題提供 5題
2. 外科的胆のう胆管造影法
話題提供 4題
3. 経口、経静脈胆のう胆管造影法 経皮的造影法
話題提供 5題
4. 術中造影法
話題提供 3題

第3回

胆嚢造影研究会開催概要

会期：1967年8月17日（木）

会場：京都

当番世話人：三好秋馬
（静岡県立総合病院 内科）

演題総数：9題



歴代会長

開催内容

主題

1. 胆道ガンの診断
話題提供 4題
追加発言 12題

2. 胆道ディスクネジー

- 話題提供 5題
追加発言 6題

第4回

胆道造影研究会開催概要

会期：1968年8月5日（月）

会場：仙台ホテル

当番世話人：佐藤寿男（東北大学第1外科）
三浦清美（東北厚生年金病院内科）

演題総数：27題



開催内容

主題

1. 胆道造影陰性例の検討と対策
話題提供 4題
予定発言 5題
口演 11題
2. 胆嚢別出術後遺症について
話題提供 4題
予定発言 2題
口演 8題

第5回

胆道疾患研究会開催概要

会期：1969年8月23日（土）
会場：福岡 博多東急ホテル
当番世話人：永光慎吾
（九州大学医学部第1外科）
演題総数：31題



開催内容

- 主題
1. 排泄性（間接的）胆のう、胆道造影法の検討
口演 6題
追加発言 4題
 2. 排泄性（間接的）造影法によって発見された胆のう及び胆管の腫瘍症例について
口演 8題
 3. 興味及び疑問のある胆道疾患について
口演 17題

第6回

胆道疾患研究会開催概要

会期：1970年8月22日（土）
会場：東京 都道府県会館
当番世話人：亀田治男
（東京大学医学部 内科）
窪田博吉
（千葉大学医学部 外科）
草地伸勲
（日本医科大学 放射線科）



演題総数：20題

開催内容

- 主題
1. 胆道造影法の検討—基準化のために—
口演 4題
追加発言 7題
 2. 胆道疾患と関係のある他臓器との相関と知識
レクチャー 5題
 3. 胆道の手術成績向上をめざして
口演 3題
追加発言 4題
 4. 症例検討
口演 8題

第7回

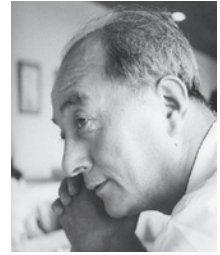
胆道疾患研究会開催概要

会 期：1971年7月24日（土）

会 場：日本生命中の島ビル（日生中の島研修場）

当番世話人：清永伍市
（大阪成人病センター）

演題総数：75題

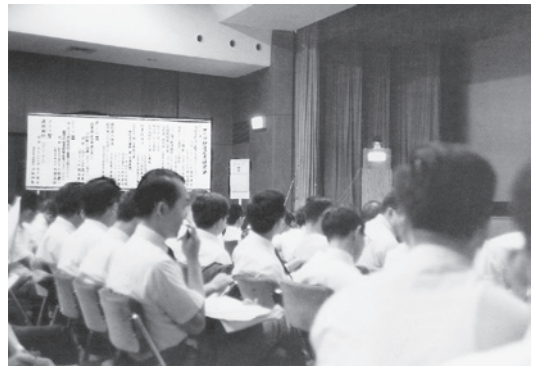


歴代会長

開催内容

主題

1. 間接造影法の基準方式
口 演 14題
2. 胆道癌（膨大部を除く）の診断と治療
口 演 22題
3. ルーチンの関節造影で異常を認めなかった器管的胆嚢胆管疾患
口 演 10題
4. 症例検討
口 演 29題



第8回

胆道疾患研究会開催概要

テーマ：『1970年前後の胆道研究の現状と展望』

会期：1972年8月19日（土）～20日（日）

会場：愛知県文化会館

当番世話人：中澤三郎
（名古屋大学第2内科）

演題総数：23題



開催内容

主題

1. 胆道造影法の検討
2. 胆石の生成とその運命及び臨床上の意義

3. 十二指腸乳頭部病変の診断と治療
4. 症例検討

開催概要

筆者が世話人のご指名を拜命したころは、まだ研究会と言って比較的規模も小さく参加者もそれほど多くはなかったと記憶しているが、胆道研究にかけると熱意はまことに盛んで皆が何とかして胆道研究を進展させようと意気に燃えていた。ただ、当時の記憶は薄れてしまって正確には覚えていない。従って、1972年前後の胆道研究について記憶をたどって記すことにする。記述の時期的なずれや漏れがあり、また、学問的な記述よりも感想文的な内容になるかもしれないので予めご容赦をお願いする次第である。当時、胆道疾患の診断や治療は内科医にとっては大変困難な状況であった。まず、一番の関心事は胆道を診ることの方法が議論されていた。胆道癌よりも胆石について研究の力点がおかれていたので、胆石生成の過程、分類、臨床と治療法などについて大いに論争がおこなわれていた。胆道疾患や膵臓疾患の研究については高山欽也先生という有名な先生がおられ、筆者も先生に教を請うつもりで折に触れてお話を伺いまた論じ合い、手術のお手伝いもさせてもらったことがある。当時は超音波診断の電子リニア装置が製品化されたばかりの時代でもあり、CTもまだ実用化されていなかったため、高山先生は圧痛点などを推奨されていた。従って、本研究会の内容も胆道をいかにしたら良く描出されるかとい

う造影法に関わる内容が多かった。胆道造影については草地先生のDICが有名であった。

経静脈的胆道造影法、経口的胆嚢造影法、経皮的胆道造影法や内視鏡的逆行性膵胆管造影法などがありそれぞれの特徴、方法、有用性、長所、短所などが議論されていたと記憶している。

胆石症は診断並びに治療法が十分に発展しておらず、まず胆石の発生原因、生成過程、コレステロール結石かビリルビン結石かなどが大いに論じられていた。胆石成分の研究、胆石生成の機序解明、東北大学、九州大学その他の研究者がそれぞれの成果を発表されていた。十二指腸乳頭部の機能胆汁排泄は収縮か弛緩かという問題もよく論争されていた。小野慶一先生はOddie氏筋の構造と機能などに造詣が深くOddieの墓場まで訪ねられたという。小野のOddieか、Oddieの小野かという位乳頭部については有名であった。一方、小林絢三先生は内視鏡を通してOddie氏筋の機能をよく研究された。

これに伴い、乳頭部の形態にも関心が高まり乳頭部のX線像や内視鏡像などの研究も進んだ。特に、服部外志之先生の十二指腸X線撮影は胆道及び膵管との関係から究めるなど乳頭の形態を的確に現わした優れた研究である。

第9回

胆道疾患研究会開催概要

会期：1973年8月24日（金）～25日（土）

会場：東京 農協ビル国際会議場

当番世話人：杉浦光雄
（東京大学医学部第2外科）

演題総数：91題



歴代会長

開催内容

主題

1. 経皮経管胆道造影法
パネル 6題
口演 18題
2. 十二指腸乳頭形成術
口演 23題

3. 胆嚢炎をめぐって
パネル 5題
口演 11題
4. 症例検討
口演 4題
示説 24題

第10回

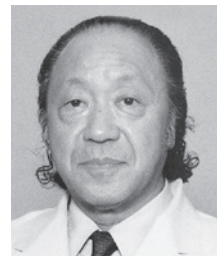
胆道疾患研究会開催概要

会期：1974年8月24日（土）

会場：経団連会館ホール

当番世話人：並木正義
（北海道大学医学部第3内科）

演題総数：63題



開催内容

主題

1. シンポジウム 閉塞性黄疸をめぐって
A) 診断の問題をめぐって
口演 6題
指定発言 17題
B) 手術適応の診断とその時期の問題をめぐって
口演 5題
指定発言 5題

- C) 外科的治療の問題をめぐって
口演 6題
指定発言 15題
2. 一般演題
示説 31題

第11回

胆道疾患研究会開催概要

テーマ：『経皮的胆管造影法の進歩とその応用』

会 期：1975年8月22日（金）～23日（土）

会 場：東京 九段会館

当番世話人：羽生富士夫
（東京女子医科大学消化器病センター）

演題総数：97題



開催内容

主題	シンポジウム	14題
1. シネクリニック	特別発言	2題
口 演 10題	口 演	20題
2. 経皮的胆管造影法の進歩とその応用	3. 一般演題	53題

開催概要

1975年8月22日（金）23日（土）東京女子医科大学消化器病センター羽生富士夫教授が会長のもと第11回日本胆道疾患研究会が東京で開催された。

当時の記録が医局に残されておらず、日本胆道学会事務局に問い合わせたところ、演題総数が97題であった。内容は、シネクリニック10題、シンポジウムタイトルは“経皮的胆管造影法の進歩とその応用”で14題、関連演題が20題、一般演題が53題であった。

羽生富士夫会長の当時の写真を掲載する。

第12回

胆道疾患研究会開催概要

歴
代
会
長

会 期：1976年8月27日（金）～28日（土）

会 場：中国新聞ホール

当番世話人：兎玉 求
（広島大学医学部第二外科）

演題総数：108題

開催内容

主題

1. 胆道デイズキネジー

口 演 11題

特別発言 1題

2. 胆道感染症

口 演 42題

特別発言 2題

3. 興味ある胆道癌

口 演 55題

特別発言 1題

開催概要

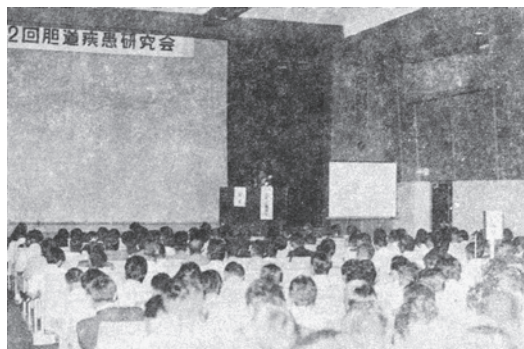
第12回日本胆道疾患研究会は、広島大学医学部第二外科の兎玉求助教授のお世話のもとで1976年8月27-28日に広島市（中国新聞ホール）で行われました。開催からすでに38年が過ぎ、当時の教室主任の江崎治夫教授、兎玉求先生はお亡くなりになり、研究会の状況を知る人はほとんどいなくなりました。私（田中恒夫）は、ちょうど1976年4月に第二外科に入局したばかりで、何もわからないまま受付の手伝いをしていた記憶があります。当時のプログラムを振り返りながら開催概要をお伝えいたします。

主題として取り上げられたのは、1. 胆道デイズキネジー、2. 胆道感染症、3. 興味ある胆道癌の3つで、演題総数は108題でした。共同演者には、のちに日本胆道学会で中心的に活躍される先生がたのお名前が多数みられ、本研究会はたいへん意義深かったと感じられます。

研究会の第一日目に「興味ある胆道癌」の55演題が口演で発表されました。当時としては概念や病態など不明な部分が多かったのですが、胆道拡張症（5演題7症例）や膵胆管合流異常症に関連すると思われる症例、choledochocoeleに合併した胆道癌症例、粘液産生胆管癌症例など、現在でも貴重な症例が発

表されています。

「胆道デイズキネジー」がおそらくメインテーマであり、胆道疾患の専門の主要施設より11題の発表がされました。当時としては最新の診断法だった



と思われませんが、現在では懐かしい検査法もみられます。臨床成績や研究成果をもとに、病態、診断、治療法などに関して活発な討議がなされたものと思います。このセッションの終わりに、特別発言として広島大学医学部第一内科の三好秋馬教授が総括をされています。

「胆道感染症」に関しては42題が発表されました。致死率も高かった急性化膿性胆管炎やPTCによる胆汁ドレナージに関する演題が多くみられています。個人的には、胆道拡張症の治療にかかわる胆道感染が取り上げられており、興味深いものがあります。

最後に、現存する資料や写真も少なく、記憶も曖昧になっており、正確な概要ではないことをお詫びいたします。

文責：田中恒夫（現 太田川病院、広島市）



第13回

胆道疾患研究会開催概要

歴代
会長

テーマ：『胆道精査法』

会期：1977年8月18日、19日

場所：仙台市市民会館、東北大学医学部講堂

当番世話人：齋藤洋一

(東北大学医学部、第一外科助教授)

参加人数：約500人

演題総数：159題



開催内容

主題

(1) 胆道精査法

口演68題、総括発言4題

(2) 十二指腸憩室と胆道疾患

口演25題、総括発言1題

(3) 興味ある胆道疾患 示説66題

開催概要

教授職になった会員はご遠慮いただいて、若い助教授以下で運営して行くという気概に富んだ、活気あふれる研究会であり、ご招待した、順天堂大学白壁彦夫 教授もその熱気に敬意の言葉をいただいた。

転居のため詳細な記録はないが、教室から発表した演題は次の様なものであった。

(1) 定流灌流法による胆道内圧値とその意義

(2) 胆道内圧測定からみた旁乳頭憩室と胆道疾患の関連について

(3) 胆のう結腸瘻を形成し黄疸が自然消退した膵内胆管癌の1例

なお、この時の主題「胆道精査法」をまとめた同名の著書が発刊されている。医学図書出版、1978. 6。

第14回

胆道疾患研究会開催概要

会 期：1978年8月23日（水）～24日（木）

会 場：千葉市民会館

当番世話人：大藤正雄

（千葉大学医学部第一内科）

演題総数：105題



開催内容

特別講演：ULTRASOUND AND CT BODY
SCANNING IN THE EVALUATION
OF HEPATOBILIARY AND PANCRE-
ATIC DISEASE

演者：Henry I. Goldberg, M.D.

Professor and Vice Chairman

Department of Radiology

University of California

主題

1. 先天性肝内胆管拡張症
口 演 42題
特別発言 2題
2. 症例報告一切除可能であった上部胆道癌（三管
合流部より上位）
口 演 35題
特別発言 2題
3. 胆道・脾の超音波診断（装置、方法、診断能、
他検査法との比較、その他）
口 演 28題
特別発言 2題

第15回

胆道疾患研究会開催概要

テーマ：『胆道感染』

会期：1979年8月30日（木）～31日（金）

会場：長崎市公会堂

当番世話人：土屋涼一
（長崎大学医学部第2外科）

演題総数：146題



歴代
会長

開催内容

特別講演：Bile Duct Carcinoma and Sclerosing
Cholangitis

演者：Ronald K. Tompkins, M.D.
Associate Professor
Department of Surgery
University of California, Los Angeles

主題

- 胆道感染の原因、病態および治療
口演 44題
特別発言 2題
- 胆石再発の原因と治療
口演 21題
特別発言 2題
- 症例報告：早期胆道癌（胆嚢癌を含む）
口演 47題
症例報告：胆管膵管合流異常
口演 34題

開催概要

第15回胆道疾患研究会は、1979（昭和54）年8月30日（木）～31（金）長崎公会堂で開催した。研究会は特別講演と主題からなり、特別講演はUCLAの外科William P. Longmire, Jr.のAssociate Professor Ronald K. TompkinsがBile Duct Carcinoma—A 24 Year Reviewを担当した。主題は重要な3題に絞って発表論文を募集したが、1. 胆道感染の原因、病態及び治療では44題、2. 胆石再発の原因と治療が21題、3. 症例報告の（1）早期胆道癌（胆嚢癌を含む）が47題（2）の胆管膵管合流異常が34題と総計146題集まり盛会であった。本研究会会長として一番気にしたことは、Longmire先生の本研究会への招聘であった。1969（昭和44）年まで京都大学第1外科に在職し、本庄一夫先生の下で肝胆膵外科を学んだ小生にとっては、教室の肝腸吻合（Hepatoenterostomy. J. Coll. Surg. 20 : 775-779, 1953）と同様な肝内胆管空腸吻合術（Intrahepatic Cholangiojejunostomy with Partial Hepatectomy for Biliary Obstruction. Surgery 24 : 264-276, 1948）を唱導した人であり、前年1978（昭和53）年第78回日本外科学会井口潔会長の招聘により、博多にてThe surgical treatment of pancreatic diseaseと題する特別講演をしたところであった。しかもこの年9月から教室の原田昇講師が彼のResearch Fellowに採用されUCLAに出向いた。小生は9月にSao PauloのThe 5th World Congress of CICDに出席することになっていたの、ブラジルの帰途UCLAに行き直接面会しLongmireに来年の研究会に出席し講演を賜りたいと申し出たのである。しかし自分は多忙で行けないが代わりに助教授のTompkinsを推薦するというので、これを承諾、外科教室の設備、手術見学を原田君に案内して貰って引き下がった。

さてTompkinsの特別講演は、当時日本ではまだ学会で見かけないCAT SCAN（CT）の像を見せ説明したのが刺激的であったが、治療内容は標準的で、一般に手術成績の悪い肝門部胆管癌に対して如何に対処するか抱負も述べることはなかった。しかし非常に聞きやすい、わかりやすい英語で有ったことが印象的であった。

小生の記憶では、特別講演の夕方、彼の宿泊先のホテルの1室を借りて、TompkinsをかこむFree

talkingの場を設けたと考えている。この時は会員から遠慮なく好きな質問をして、有意義な会であったと思った。おそらくこの時であろう、彼は欧米の同好の人に呼びかけ、International Biliary Association（IBA）を立ち上げ自分はその会長になっているので、来年は、HollandのMaastrichtで行われるが、日本からの沢山の参加者を希望すると発言した。小生は東北大学第1外科の佐藤寿雄教授と相談し、教室員の希望者と共に入会することにした。第2回より毎年IBAに出席したが、小生は1984年からcouncilmanとなり佐藤教授は1986（昭和61）年仙台で第8回IBAを開催され大盛会であった。小生のcouncilmanの任期は1987年までだったので、1988年からは筑波大学臨床医学系内科の大菅俊明教授に引き継いで頂いた。

ローマで開かれた第7回IBAのcouncil meetingにおいて、これまでIBAのTreasurerであったStig Bengmarkが別の学会International Hepato-Pancreatico-Biliary Surgery（IHPBS）の設立を目論んでいるのに対抗して、International Hepato-Pancreatic Biliary Association（IHPBA）と名称も内容も拡張したものにするか、あるいは合併を考えるかという議論が出た。しかし第7回ローマ、第8回仙台のIBA会長はスペインのPuis LaCallであったが、かれは合併というようなことは考えず、別箇に行動しようという意見であった。ところがオーストラリアのAdelaideの第9回IBAから会長が英国のLeslie Blumgartに替わった途端、彼は合併を主張し饒舌を早口で捲し立てたのに閉口した。この会には前会長Puis LaCallは来ていなかった。小生はその後の議論には関係していないので、詳細は不明である。

第16回

胆道疾患研究会開催概要

歴代会長

会 期：1980年8月28日（木）～29日（金）

会 場：愛知県勤労会館

当番世話人：武内俊彦
（名古屋市立大学医学部第1内科学教室）

事務局：宮治 眞
（名古屋市立大学医学部第1内科学教室）

演題総数：156題



開催内容

主題Ⅰ：十二指腸乳頭部病変（口演：44題、特別発言：3題）

イ）形態の面から

座長：原田英雄、春日井達造、林 活次、
青木春夫

ロ）機能の面から

座長：三宅健夫、古味信彦、小野慶一

ハ）治療の面から

座長：香月武人、中山和道、水本龍二

特別発言

座長：佐藤寿雄

発言者：イ）形態の面から— 中沢三郎

ロ）機能の面から— 小林絢三

ハ）治療の面から— 斎藤洋一

主題Ⅱ：胆石症とその合併症（口演：50題、特別発言：2題）

座長：杉浦光雄、葛西洋一、由良二郎、
窪田博吉、室久敏三郎、田島芳雄、
黒田 慧、菅田文夫、大野孝則、
宮崎逸夫

特別発言

座長：三好秋馬

発言者：亀田治男、土屋涼一

主題Ⅲ：症例報告一良・悪性の鑑別が困難であった胆道病変（示説：62題）

座長：谷村 弘、高田忠敬、相馬 智、
岡村 純、内藤靖夫、児玉 求、
後藤和夫、清永伍市、三樹 勝、
有山 襄、伊藤 誠、兵頭春夫

開催概要

第16回(昭和55年8月28日~29日)胆道疾患研究会の当番世話人を仰せつかり、このたび日本胆道学会50周年記念誌の執筆依頼を受けました。すでに30年余を過ぎており、その間、退職、病院の移転、勤務先の変更などがあり、各種資料の廃棄、整理などにより研究会に関する資料も極めて少なく、しかも記憶も定かではなく、記憶違いなどがあるかも知れず、その点ご理解を賜りたいයි。全く偶然に入手しえた資料は、第16回胆道疾患研究会プロシーディングス(1980年8月4名古屋)、第18回胆道疾患研究会プログラム(故菅田文夫教授)と事務局から送付されたものだけです。それにしましても、今後のことを考えますと、資料保存の重要性を再認識されました。なお、故亀田治男教授が日本胆道疾患研究会、胆道学会設立への経緯が詳述(胆道Vol 1. No. 1 1987. 15-17)されており、大切な資料です。当時の記憶の薄れがあるにしても、主催者として当時の実情を伝えておくことも責務と考えまして執筆するしだいです。

第16回研究会は私が教授に就任して初めての全国レベルの研究会であり、当時の宮治眞講師(現名古屋市立大学医学研究科客員教授)の協力をえて、第15回以前の経過、問題点、当時の状況などを勘案して、第16回の準備に取り掛かりました。宮治兄君も時間的余裕も少なく、もちろんきちんとした会則、運営法もなく、戸惑われたはずで。併せて第17回当番世話人は故宮崎逸夫教授(金沢大学外科)に決まり、資料とともに運営などのバトンタッチも宮治君にお願いしました。

最初に行ったことは、第15回研究会の当番世話人の土屋諒一教授(長崎大外科)に、準備、経過などと共に会員名簿について伺ったことです。名簿は単純な一覧表でしたので、アカサタナ…に分類し、会員番号を付して整理しました。不慣れなため手間隙がかかり、コンピュータもなく苦勞しましたが、本稿の執筆と同様宮治君と相談して決断し、開催通知を発送しました。プログラム構成は主題、口演、特別発言があり、示説としての症例報告でした。資金繰り(会場整理費3000円・当日プロシーディングス代は印刷費として2500円・事前のプロシーディングス代は3000円)も苦勞しましたが、それ以上

に会場の確保(口演会場、示説会場)には相当難渋しました。口演、示説会場の併せた確保とともに、事前申し込みは抽選でハラハラしながら、何とか鶴舞公園南側の愛知県勤労会館が確保できホッと一息ついた思い出です。

当番世話人としてのプログラムは、主題I:十二指腸乳頭部病変イ)形態の面から・ロ)機能の面から・ハ)治療の面から、主題II:胆石症とその合併症、主題III:症例報告一良・悪性の鑑別が困難であった胆道病変一を選定しました。その背景は記しておきたいと思います。昭和55年頃はPTCによる直接胆道造影(千葉ニードルを使用)、HDG(低緊張性十二指腸造影)さらにはEPCG(ERCP)などの造影(映像)が流布し始め、私たちもPTC、HDGの併用を試みていた時期です。とくにPTCは肝内胆管の穿刺可否による肝内、肝外胆汁うっ滞の鑑別が試行されていたと思います。当時、初期の2例の乳頭部癌を経験し、私も当日若干のコメントをさせていただきました。とくに胆汁、膵液の出口としての「十二指腸乳頭部病変」を形態、機能、治療に焦点を当てたものです。

近年の画像診断の精彩はコンピュータ技術に負うことが多く、当時の診断、治療技術から現在を予測することの難しさを痛感しています。また免疫染色を含む病理学、分子生物学などの寄与も一層重要な位置を占めることになろうと推察しますが、老いの身にどこまで付いていけるか不安も感ずるこの頃です。ただ老婆心を承知で申せば、患者個人を診療する原点に戻る大切さも痛感しています。

最後になりますが、記憶が日に日に失われていくなかで、関係者の執筆依頼のお取り計らいに深謝したいと思います。同時に、第16回のプロシーディングスを前にして、すでに鬼籍に入られました先達、同僚、後輩の方々のご支援に改めて敬意と哀悼を表すものです。老人の戯言であることに免じて駄文のお許しを請うしだいです。

第17回

胆道疾患研究会開催概要

会 期：1981年8月27日（木）～28日（金）

会 場：金沢市観光会館

当番世話人：宮崎逸夫
（金沢大学医学部第二外科）

演題総数：188題



歴
代
会
長

開催内容

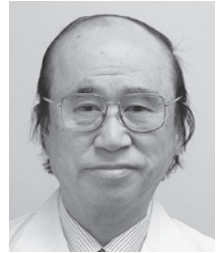
主題

1. 成人にみられる先天性総胆管拡張症
口 演 40題
特別発言 4題
示 説 41題
2. 胆道癌の診断と治療
口 演 55題
示 説 52題

第18回

日本胆道疾患研究会開催概要

会 期：1982年8月27日（金）～28日（土）
会 場：社団法人経済団体連合会（経団連会館）
当番世話人：菅田文夫
（昭和大学藤が丘病院消化器内科）
演題総数：133題



開催内容

特別講演Ⅰ「脳・腸管ペプチド、どの生合成と生理的意義」

演者：矢内原昇（静岡薬科大学）
司会：三好秋馬

特別講演Ⅱ「胆汁色素系胆石の成因について」

演者：鈴木範美（東北大学医療技術短大部）
司会：佐藤寿男

特別講演Ⅲ「胆汁分泌に関する最近の話題」

演者：木谷健一（東京都老人総合研究所生理学部
臨床第一研究室）
司会：亀田治男

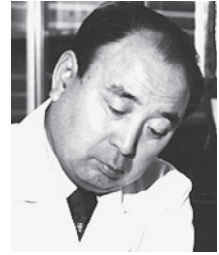
主題

1. 総胆管結石症をめぐる諸問題
A) 成因 B) 診断 C) 治療とくにEPT (EST)
を中心として
口 演 66題
特別発言 6題
示 説 4題
2. 経口溶解療法の現状と将来
口 演 12題
特別発言 2題
示 説 4題
3. Mirizzi症候群（クライテリアの問題を含めて）
口 演 15題
特別発言 2題
示 説 32題

第19回

日本胆道疾患研究会開催概要

会 期：1983年8月26日（金）～27日（土）
会 場：共催ホール・共催サロン琴の間（札幌）
当番世話人：葛西洋一
（北海道大学第一外科教授）
参加人数：約700名
演題総数：162題



歴
代
会
長

開催内容

- 特別講演 José Picazo Medical director: Novo
Research Center
Glucagon in the Diagnosis and Treat-
ment of Biliary Disease
司会 佐藤寿雄
- 主題Ⅰ 治療困難な肝内結石症 57題
総括発言（Ⅰ）
司会 土屋涼一
発言者 亀田治男、宮崎逸夫
- 主題Ⅱ 排泄性胆嚢造影陰性例とその病変 57題
総括発言（Ⅱ）
司会 武藤輝一
発言者 菅田文夫、武内俊彦
- 主題Ⅲ 早期の胆管癌（示説） 48題
総括発言（Ⅲ）
司会 森岡恭彦
発言者 羽生富士夫、斉藤洋一

開催概要

日本胆道疾患研究会は会員数も増え、本第19回の後第22回を最後に日本胆道学会と名称、組織を改め発展的に移行した。

当時を振り返ると、第19回胆道疾患研究会のころは胆道系疾患の診断と治療が大きく進展し始める変換点の時期であったように思われる。折しもその頃厚生省特定疾患研究課題として「肝内胆管障害に関する研究」が推進され、肝内結石症の基礎と臨床の研究が進められた。成因、診断法開発、治療法開発などが行われ、肝内結石症病型分類、治療ガイドラインなどが発表された。

厚生省癌研究助成金事業の課題としては「胆嚢胆管癌に関する研究」などが取り上げられ、基礎、内科、外科の胆道疾患の研究者が研究班を結成し（班長葛西洋一教授）「治療成績向上のための集学的な診断法、治療法の開発に関する研究」が鋭意進められ、胆道系難治疾患に対する戦略が国家的にも注目され始めた頃である。現在、当然のように駆使している高性能画像診断装置の超音波診断機器、CT、MRIもまだ普及しているとはいえない時期でもあった。

このような背景の中、取り上げるべき主題を検討した。検討の結果、葛西会長肝いりで、主題Iは良性疾患でありながら難治であり各施設ではそれほど症例数も多くない肝内結石症の診断と治療法を施設の経験例を持ち寄って議論しようと提案された。

主題IIは胆道疾患研究会の原点である排泄性胆道造影法に関わる話題を選択させていただいた。

主題IIIは、胆道系の診断法もそのツールが少ない時代、早期の胆管がんの診断は大変困難な時代であり、早期の診断が治療成績の向上につながるという観点から、早期と思われる胆管がんの話題を取り上げた。

この主題は各施設の経験もそれほど多くはないであろうと思われるところから症例を克明に検討したいという観点で、示説でお願いすることにした記憶がある。さらに、会長の意見で早期胆管がんという定義も概念もお定かではない時期でもあるという認識で、「早期胆管がん」とはせず「早期の胆管癌」と間に「の」を入れて表現した。

今日公にも「癌」は用いず「がん」とひらがな表

記するのが多いと思われるが、ちょうどこの頃が変換点であり、主題表記も「癌」が用いられている。

研究会でありながら162演題、700名の参加を得て行われた研究会であった。研究会でもあり、演題は応募全演題を採用し検討した。

それぞれの主題におよそ50演題の応募があり、各主題にはそれぞれ総括発言をお願いし、とりまとめをしていただいた。

特別講演はNovo研究センターのJosé Picazo先生にGlucagonと胆汁、消化管ホルモンと胆道の機能、診断と治療とのかかわりに関する講演をしていただいた。

あれから31年目、故葛西洋一当番世話人を始めとして、当時本学会の牽引役をされた多くの方々が故人となったのは残念である。

会員数も増加し学会に発展した思い出深い研究会であったと記憶している。

(文責) 柿田 章

北里大学名誉教授・元北大第一外科助教授
日本胆道学会特別会員
医療法人常磐会 いわき湯本病院名誉院長

第20回

日本胆道疾患研究会開催概要

歴代会長

テーマ：『胆道機能異常をめぐる諸問題』

会期：1984年8月24日（金）～25日（土）

会場：大阪商工会議所、国際ホール

当番世話人：小林絢三

（大阪市立大学医学部第三内科助教授）

準備委員長：辰巳駿一

（大阪市立大学医学部第三内科）

プログラム委員：木下博明、針原重義、辰巳駿一、小野時雄、北野厚生、三谷栄時

参加人数：350名

演題総数：113題



開催内容

主題

I. 胆道機能検査の新しい試み

II. 胆道画像診断の限界

III. 膵・胆管合流異常と胆管癌

特別講演：胆道機能異常をめぐる諸問題

静岡県立総合病院院長 三好秋馬 博士

シンポジウム

I. 胆道機能検査の新しい試み

司会：大藤正雄、小野慶一

指定発言 内科 小林絢三

外科 佐藤寿雄

II. 胆道画像診断の限界

司会：中沢三郎、永川宅和

指定発言 内科 亀田治男

外科 水本龍二

III. 膵・胆管合流異常と胆道癌

司会：武内俊彦、木下博明

指定発言 病理 須田耕一

外科 古味信彦

開催概要

第20回日本胆道疾患研究会のコンセプトとして、「胆道機能異常をめぐる諸問題」を取り上げました。勿論、癌など悪性疾患の診断と治療は、基本的に重要であることには論を待ちませんが、それと並行し、それを、背景から支えるものとして、同部の生理機能、病態生理機能の解明は必須の課題と考えられます。

後者の話題として、近年、胆道ジスキネジー、胆摘後症候群などの機能異常の話題が問題として取り上げられてきています。

また、基礎研究者、あるいは内科系、特に、近年長足の進展を遂げつつある、消化器内視鏡学の進歩、関与が胆道系機能、ならびにその異常の解明に大きく貢献しようとしています。

上記の基本理念のもと、本会の主題を選定しました。



ポスター会場



シンポジウム I 胆道機能検査の新しい試み



学会終了後のスタッフ集合

第21回

日本胆道疾患研究会開催概要

会 期：1985年8月23日（金）～24日（土）

会 場：四日市市文化会館

当番世話人：水本龍二

（三重大学医学部第一外科教授）

参加人数：700名

演題総数：156題

特別講演：1題、シンポジウム：32題、

一般演題：口演58題、示説65題



歴
代
会
長

開催内容

主題1. 胆道癌進展度の画像診断

2. 胆嚢小隆起性病変の鑑別診断と治療
3. 胆石の非観血的治療

特別講演「胆道疾患における胆汁酸代謝をめぐって」

牧野 勲

シンポジウム

1. 「胆道癌進展度の画像診断」(10題)

司会：有山 襄、中山和道

特別発言：大藤正雄、都築俊治

2. 「胆嚢小隆起性病変の鑑別診断と治療」(11題)

司会：土屋幸浩、内村正幸

特別発言：福田守道、佐藤寿雄

3. 「胆石の非観血的治療」(11題)

司会：藤田力也、鈴木範美

特別発言：竹本忠良、土屋涼一

開催概要

シンポジウム1では、胆道癌の術前診断自体が難しいが、US、CT、血管造影等の画像診断を駆使して、いかに胆道癌の進展度を術前に判断するか討論されたが、進行癌では治療を行っても予後は悪く、早期癌の発見が最も大切であるとの印象をうけた。

シンポジウム2では、腹部US検査10,411例中、331例(3.2%)に小隆起病変をみとめ、大きさとエコーパターンからこれらの症例が検討された。特に会長が小隆起性病変を1.5cm以下に限定したことにスクリーニング上、意義があり、討論の中でも1cm以上の隆起性病変に悪性病変の頻度が高いことが指摘

された。なお、この結果は司会のお二人により日消誌、83：2086—2087, 1986に発表された。

シンポジウム3では、胆石の治療は手術ばかりではなく、経皮経肝胆道鏡を用い、さらにYAGレーザー、Microwave、電気水圧衝撃波を用いて遺残結石を切石するという努力も行われていた。

シンポジウム以外の123題は3つの主題に沿って口演と示説に分け(主題1. 口演15題、示説15題; 主題2. 口演21題、示説22題; 主題3. 口演22題、示説28題)、24名の座長のもとで討論され、示説の討論も活発で好評であった。



水本当番世話人開会挨拶

第22回

日本胆道疾患研究会開催概要

会 期：1986年8月22日（金）～23日（土）

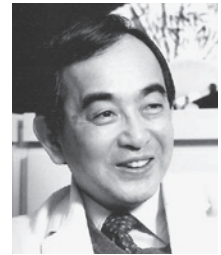
会 場：経団連会館

当番世話人：大菅俊明

（筑波大学臨床医学系内科）（現 筑波大学医学医療系消化器内科）

参加人数：571名

演題総数：155題



歴
代
会
長

開催内容

主題：1. 胆道癌の背景因子

2. 胆道への非手術的アプローチ

3. 胆石溶解療法の問題点と対策

4. 胆道癌に対する集学的治療

特別講演：1. Cholekineticsと消化管ホルモン

伊藤 漸

群馬大学医療技術短期大学部 教授

2. 胆嚢疾患の臨床病理

武藤良弘

琉球大学第1外科 助教授

開催概要

第22回日本胆道疾患研究会は、我が恩師 故大菅俊明 筑波大学消化器内科教授を当番世話人として、1986（昭和61）年8月22日、23日の両日、東京の経団連会館において開催された。翌年から「日本胆道学会」へと発展する日本胆道疾患研究会としては最後の研究会であった。

一般演題の公募主題として、「1. 胆道癌の背景因子」、「2. 胆道への非手術的アプローチ」、「3. 胆石溶解療法の問題点と対策」、「4. 胆道癌に対する集学的治療」の4つのテーマが取り挙げられ、そのうち2と4については、シンポジウムとしても取り挙げられた。

このうち、「胆道癌の背景因子」では、膵管胆管合流異常症や胆石症の背景因子としての重要性が各施設より報告された。「胆道への非手術的アプローチ」では、経皮経肝胆管ドレナージ（PTBD）・胆嚢ドレナージ（PTGBD）、肝内結石の経皮経肝胆道鏡（PTCS）下切手術、超音波内視鏡（EUS）とその応用、内視鏡的胆汁ドレナージ（ENBD、ERBD）、経口胆道鏡、等の成績が紹介された。現在では、標準診断・治療法となっているこれらの手技が28年前の本会で、すでに紹介されていたことには、今更ながら驚かされる。次の「胆石溶解療法の問題点と対策」は、大菅先生が最も力を入れたテーマであった。我が国で生まれたウルソデオキコール酸による胆石溶解療法の成績、問題点（再発、石灰化）と対策、適応に関して各施設より発表され、活発に討論された。「胆道癌に対する集学的治療」では、

放射線術中照射、術後照射、胆管腔内照射、マイクロ波経皮的温熱療法、等の成績が紹介され、化学療法の有効性はまだ示されていなかったが、進行胆道癌の治療は集学的アプローチを要するとの認識は、すでに共有されていた。シンポジウムに20題、一般演題は口演72題、示説（ポスター）63題で、計155演題であった。計571名の会員が参加した。

特別講演は、群馬大学医療技術短期大学部 伊藤漸教授が「Cholekineticsと消化管ホルモン」、琉球大学第一外科の武藤良弘助教授が「胆嚢疾患の臨床病理」について、それぞれ御講演された。

私は、この時、まだ卒後4年目、入局2年目の若輩で、本会も初参加だったが、本会では、他の学会や研究会と異なり、討論が実に活発かつ極めて率直（ときに、ほとんど喧嘩調）である点には、大変、驚かされた（正直、怖かった！）。しかし、激しい討論の続きが、会場の外で仲良く和やかに行われている光景も目にして、一服の清涼感を覚えたことも記憶している。そして、胆道疾患研究会としての最後の懇親会では、久留米大学第二外科 中山和道教授が、「我ら胆道オタク、学会になっても活発な討論の伝統は、是非、守って行こう！」と元気良く氣勢を挙げて乾杯の音頭を取られた。翌年から学会となって28年、この胆道オタクの伝統が守り続けられていることは、誠に御同慶の至りであり、大菅先生を含む多くの大先輩達も、きっと御喜びのことであろう。

（文責：筑波大学医学医療系消化器内科 安部井誠人）



会終了後のスタッフ集合写真（中央に大菅世話人）

第23回

日本胆道学会総会開催概要

歴
代
会
長

会 期：1987年8月21日（金）～22日（土）

会 場：弘前文化センター

会 長：小野慶一
（弘前大学医学部 第二外科 教授）

演題総数：189題



開催内容

シンポジウム「Oddi括約筋の形態と機能」

司会：中澤三郎、高田忠敬

- 1) Oddi括約筋部の形態学的研究 —筋構築と内在性自律神経支配を中心に— 石川 功、他
- 2) Oddi括約筋と膵胆管合流異常 須田耕一、他
- 3) 胆汁排出機序とOddi筋運動 鈴木英登士、他
- 4) 胆管結石のない良性十二指腸乳頭部病変に対する経皮経肝乳頭部圧および胆道内圧測定の検討 秋田幸彦、他
- 5) 内視鏡下乳頭部圧測定法によるOddi括約筋運動機能の評価 —形態と機能の関連性について— 乾 和郎、他
- 6) 胆石症におけるOddi括約筋の異常 —cine-ERCP画像を中心とする臨床的検討— 中村義徳、他
- 7) Oddi括約筋の機能異常 —腫管X線像と胆管圧波形の動態観察による検討— 土屋幸浩、他
- 8) 可変式負荷胆道内圧測定よりみたOddi括約筋の機能評価 上野桂一、他
- 9) 乳頭部病変の臨床的・実験的検討 伊勢秀雄、他
- 10) 胆道内圧流量曲線による乳頭部通過性の評価 別府倫兄、他

特別発言 東北大学名誉教授 榎 哲夫

パネルディスカッション「肝内結石症治療の現況」

司会：中山文夫、大藤正雄

- 1) 教室における肝内結石治療法の検討 松元定次、他
 - 2) 肝内結石症治療の現況 宮崎耕治、他
 - 3) 教室における肝内結石症治療の現況 永川宅和、他
 - 4) 乳頭機能からみた肝内結石症の病態と治療 松代 隆、他
 - 5) 遠隔成績からみた肝内結石症に対する肝切除の意義と問題点 中村光司、他
 - 6) 肝内結石症保存療法の成績 岡田周市、他
 - 7) 肝内結石症の内視鏡的治療 —13年間の経験— 山川達郎、他
 - 8) 肝内結石症治療の現況 —胆道鏡下レーザー碎石法による治療— 山崎義和、他
 - 9) i経皮経肝胆道鏡検査（PTCS）を用いた肝内結石症治療の現況 早川直和、他
 - 10) 胆道鏡による肝内結石の非手術的治療における電気水压碎石法の有用性 遠藤正章、他
- 特別発言 九州大学名誉教授 西村正也
- 会長講演「Ruggero Oddi—括約筋発見100年を記念して」

小野慶一 司会：佐藤寿雄

要望演題1

要望演題2

一般演題

開催概要

第23回日本胆道学会総会は、弘前大学第二外科故小野慶一教授を会長として、1987年8月21日、

22日の両日、青森県弘前市で開催されました。会員数2800人を超える学会にまでに発展した勢いそ

のままに、熱気溢れる会員の皆様を前にして、「猛暑の続く西日本の皆様には、軽井沢の如き弘前の涼を楽しんでいただければ幸いです。」との開会挨拶で開幕いたしました。

この年は、丁度Sphincter of Oddi発見100年にあたり、小野教授は学会移行後第一回目となる記念の学術集会で、密かに記念行事をやろうと計画をされていたようです。上級演題のテーマは、シンポジウムに「Oddi括約筋の形態と機能」、パネルディスカッションに「肝内結石症の治療の現状」を選定され、また、自ら「Ruggero Oddi—括約筋発見100年を記念して」と題して、会長講演をされています。以下、小野教授が残された記録をもとに会長講演の概略を記します。

睥および胆管開口部は周囲を取り巻く輪状筋線維によって閉鎖され、これがOddi括約筋と名付けられていることは周知の通りです。同括約筋は1887年Perugia大学医学部4年生のRuggero Oddiによって初めて記載され（Oddi R: Di una special disposizione a sfintere allo sbocco del coledoco. *Annali Dell' Universita Libera di Perugia* 1887; 2: 249-264）、したがって今年はその原著刊行100年目の記念すべき年にあたります。

Oddiの輝かしい業績とは裏腹に、その生涯はイタリア本国のみならず、生地Perugiaでも謎に包まれたままでした。私はOddiの生涯の軌跡に光を当てようと試み、Perugiaを訪ねました。Perugiaは紀元前から続くUmbria地方の中心都市で、Perugia大学は医学部を主力とする700年の歴史を有する大学です。私は医学部内にOddiに関するモニュメントなり、何らかの記念物件を期待して訪れたのですが、その痕跡もなく、対応していただいた外科病理学Consolandi主任教授ですら、OddiがPerugiaに生まれ輝かしい研究業績を挙げたことを私達によって初めて知らされたほどでありました。

その後、Perugia市当局に私達の訪問を高く評価いただき、市評議員のRomizi女史ならびにPerugia大学解剖学教室Sorretti教授が中心となってOddiの事蹟調査が行われる事となりました。結果、Oddiの軌跡が明らかとなり、Oddi生誕120年にあたる1984年7月20日、彼の業績を記念してPiazza Ruggero Oddi（Oddi広場）の開設が決定されたとのことです。

Oddiは1887年Arturo Marcacci教授の指導で2編の論文を執筆しています。括約筋に関する論文は第2編目で、Oddiがイヌの胆摘後に総胆管や肝管が異常に拡張していることを見いだしたところ、Marcacci教授は十二指腸内の総胆管末端部に何か特殊な機構が存在することを示唆するのではないかと疑われ、この研究に向かうことを許可されたようです。その結果、総胆管十二指腸開口部付近での完全に独立した輪状筋構造を凶解するとともに、括約筋と腸筋層との関係を詳細に顕微鏡観察し、さらに末端部における十二指腸筋層から独立した括約筋機構の存在を結論づけました。また、Wirsung管末端にも同様の機構を確認しています。

その後OddiはBolognaの生理学研究所、そしてFirenzeの国立高等専門アカデミーに移籍して括約筋弾力性に関する論文を提出し、医学博士号を取得、さらに30歳の若さでGenova大学生理学研究所教授に招聘されています。（以降、省略）

小野教授は講演の後半では、Oddiが1913年3月27日にTunisで亡くなるまでの半生を、その後の業績を混じえながらお話されています。

さらに、シンポジウムでは、東北大学名誉教授（弘前大学初代教授）横哲夫先生が、「今度の学会でOddi筋の問題が大きく取り上げられたのは、胆道末端部の病態や機能については必ずしも十分に解明されていないところがあるからだろう。本日は多くの方が画像診断だとか内圧測定その他様々な方法で、胆道末端部の異常についてお話をさしたが、乳頭部括約筋領域の病態を表現することは今なお大変難しいと感じた。」と特別発言をされています。

会場にはRuggero Oddiの事蹟を展示したコーナーも設置され、胆道疾患の病態と胆道末端の機能との関係に強く目を向けられた、小野会長の想いのこもった学術集会ではなかったかと思えます。

第24回

日本胆道学会総会開催概要

歴
代
会
長

会 期：1988年8月19日（金）～20日（土）

会 場：栃木県宇都宮市文化会館

会 長：兵頭春夫
（獨協医科大学放射線科教授）

プログラム委員：山田 喬、亀田治男、菅田文夫、松本泰二、原田 尚、大井 至、
金澤暁太郎、香月武人、田島芳雄、山川達郎、高田忠敬、有山 襄、
渡辺五朗、石原扶美武、山中桓夫、黒田 慧、戸松 成、竹原靖明、
柴田耕司、打田日出夫



参加人数：約800名

演題総数：200題

招待講演：1題、特別講演 1題、会長講演 1題

シンポジウム：21題、シンポジウム関連36題、一般演題143題

開催内容

招待講演「International Radiology of the Biliary System」 Anders Lunderquist

Central Department of Diagnostic Radiology,
University Hospital, Lund, Sweden

司会：大会長

会長講演「ドイツレントゲン博物館の紹介」

兵頭春夫

司会：西岡清春

特別発言「ドイツレントゲン博物館の紹介—追加」

Ernst Streller（博物館館長）

特別講演「黒色胆石の病態と臨床」 亀田治男

司会：香月武人

シンポジウム

(1)「胆道癌の早期診断とその病理学的基準 9施設から発表」 司会：山田 喬、渡邊英伸

特別発言：宮崎逸夫

シンポジウム (1) の関連演題 12題

座長：矢谷隆一、武藤良弘、桜井幹巳

シンポジウム

(2)「胆道疾患における診断手技を応用した治療

12施設から」 司会：打田日出夫、有山 襄
特別発言：羽生富士夫

シンポジウム (2) の関連演題 24題

座長：中山和道、黒田知純、高田忠敬、武内俊彦、
二村雄次、小山研二、木戸長一郎

一般演題1日目（座長22名）

座長：渡辺五朗、松代 隆、中山和道、黒田知純、
高田忠敬、武内俊彦、吉田奎介、永川宅和、水
本龍二、田島芳雄、土屋涼一、山川達郎、斎藤
洋一、木南義男、岩村健一郎、森田 穰、古味
信彦、大井 至、内村正幸、竹原靖明、松本泰二、
藤田力也

一般演題2日目（座長23名）

座長：山中桓夫、菅田文夫、黒田 慧、柴田久雄、
船曳孝彦、川原田嘉文、小林絢三、鈴木範美、
中山文夫、盛岡恭彦、金澤暁太郎、小野慶一、
原田 尚、中澤三郎、戸松 成、玉沢佳巳、大
菅俊明、岸本真也、並木正義、柿田 章、大藤
正雄、奥村 恂、杉浦光雄

開催概要

第24回日本胆道学会学術集会の開催内容、開催概要に就いて、本学会50周年記念誌への執筆依頼

を頂き誠に光栄です。

学会は昭和63年（1988年）8月19日、20日の2

日間、栃木県宇都宮市の文化会館で開催、学術発表は3会場（大ホール、小ホール、一般会議室）を使用し、医療機器展示も会館展示ホールを使用した。

学会の準備には日本医学放射線学会始め、多くの会員から貴重な助言、援助を頂きました。微力ながら学会の将来の発展に少しでも貢献し得ればと思ひ、賛助会員の勧誘、学会のピーアールにも勤め、参加される会員に『内容のある学会であった』と記憶されるように準備をすすめた。

以下、執筆依頼に出来るだけ添える様、胆道学会誌 Vol. 2、No. 3の記録をして回顧してみる。

公募演題-1 シンポジウム

初日のシンポジウムとしては、早期の胆道癌に就いて臨床と病理の関係が、施設により多少混乱が出始める程、診断・病理共に進歩している点に注目し、“胆道癌の早期診断とその病理学的基礎”をテーマにした。受理した21題は何れも示唆に富む内容で9題をシンポジウム、12題をシンポ関連として発表して戴いた。

2日目のシンポジウムとして“閉塞性黄疸の診断手技を応用した治療”を取り上げた。このテーマは既に10数年前より放射線科、外科、内科の壁を越えて多くの施設で行われ、本学会発展に大きく寄与していたが、内視鏡、超音波からのアプローチ、器材の改良・進歩など、その様相に変遷が見られる様になっていた。そこで、現状を知り、より一層の発展を期待して各会の付託に応えることを狙った。シンポジウムとして応募頂いた演題数は33題で、これに関連した一般演題を加えると49題に達した。何れも着眼点に興味をそそる内容で12題をシンポ、シンポ関連24題として残りの13題は一般発表に回って頂いた。また、この領域で知名度の高いスエーデンのルンダークウイスト教授を招待講演者として招いた。

公募演題-2

要望演題の公募は“学会だから必要としない”との助言も戴いたが、プログラム委員からの助言に基づき、演題の主旨が生かされる様配慮した。シンポジウムの設定に時間が制約されたので、総て要望に応えられなかった。その中には“StageIII、IVの胆道癌3年以上長期生存例”の演題21題、無症状胆石を巡る諸問題7、肝十二指腸間膜に関する疾患の診断と治療9、胆石溶解療法の評価VII、胆石と大腸癌合併例18題などが含まれていた。その他貴重な

症例報告・合流異常・胆道の機能・胆石の生成から溶解・碎石・免疫・腫瘍マーカー・超音波・CT・angio.など66題を戴き、総て採用した。シンポを会わせると200題の発表がなされた。

学会参加数：約850人

日本消化器病学会の後日理事長をなされた当時名古屋大学の中澤三郎先生から、『研究会から脱皮して学会らしくなった』と激励と労の言葉を戴いた。



第24回日本胆道学会理事会 宇都宮グランドホテル



第24回日本胆道学会意見交換会



6：10p.m. 第1日目の日程をすべて終え、会長招宴へ向かう理事と。左から、名古屋市大教授・武内俊彦氏、名大助教授・中澤三郎氏、筑波大教授・大管俊明氏、宮崎医大教授・香月武人氏

第25回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：1989年8月24日（木）～25日（金）
会 場：サン・ホテル・フェニックス宮崎国際会議場
会 長：香月武人
（宮崎医科大学第一外科教授）



歴
代
会
長

開催内容

特別講演「胆道癌の治療」

水本龍二

三重大学医学部第1外科教授

座長 土屋涼一

長崎大学医学部第2外科教授

パネルディスカッション（12題）

「いわゆる早期胆嚢癌の診断と治療」

司会 田代征紀

熊本大学医学部第1外科助教授

有山 襄

順天堂大学消化器内科助教授

特別発言 渡邊英伸

新潟大学医学部第1病理教授

特別講演「消化器疾患と胆汁酸」

大菅俊明

筑波大学臨床医学系内科教授

座長 亀田治男

東京慈恵会医科大学第1内科教授

会長講演「胆石症と特殊病態との相関をめぐる諸問題」

香月武人

宮崎医科大学第1外科教授

座長 兵頭春夫

獨協医科大学放射線医学教授

シンポジウム（7題）

「傍十二指腸乳頭憩室の臨床的意義と対応」

司会 久次武晴

佐賀医科大学外科教授

大藤正雄

千葉大学医学部第1内科教授

一般口演（139題）（良性疾患90題 悪性疾患49題）

開催概要

日本胆道学会機関誌「胆道」創刊の辞によれば、1965年に発足した「胆嚢造影研究会」が本学界の源流である。駆出し外科医の頃のとときめきの深層に、京都五山送り火「大文字焼き」の松明の瞬きに感動したころの風景が残っている。1982年には「日本胆道疾患研究会」に脱皮し、1986年「日本胆道学会」創設、機関誌「胆道」が創刊された。その3年目、節目の第25回日本胆道学会の会長を拝命して、その責務の重大さを痛感した心境が「総会へのご案内」から窺える。

前日の23日、評議員会に続いて、高千穂・岩戸

神楽で神々しく歓迎申し上げた記憶も鮮やかによみがえる。

学術集会の基本方針を、良性・悪性胆道疾患の均衡ある活発な討議に配慮することとした。

当時増加傾向の胆道癌（男性死亡率3位、女性8位）全国11,286例の解析結果に基づいた特別講演「胆道癌の治療」を水本龍二教授に、土屋涼一教授に司会の労を執っていただいた。

パネルディスカッション「いわゆる早期胆嚢癌の診断と治療」では、田代征記・有山 襄両助教授に12題の口演を選んで頂き、新潟大学医学部第一病

理渡辺英伸教授に特別発言をお願いした。司会の両先生は、渡辺教授にも全般にわたった討論に加わって頂き、最後に、極めて有意義なコメントと、印象深い演出をして頂いた。

筑波大学臨床医学系大菅俊明教授の特別講演「消化器疾患と胆汁酸」は、亀田治男次期会長の司会で、コレステロール胆石の成因論から胆石溶解療法、肝内結石の成因、原発性胆汁性肝硬変症治療の可能性など、胆汁酸を巡る研究の神髄を堪能させて頂いた。

会長は、胆嚢摘除後症候群との関連で、恩師三宅博先生が、手術中膝硬度（正常は「ツンゲン・ワイヒ」と表現されていた）でかねて注目されていた慢性膝障害本態の機能的・形態学的解析を試みてきた結果、「胆石随伴性膝障害」が胆石症の55.5%に合併する。最終的には軽微な膝線維化が4.3%に遺残し、その内1.7%は術後不定愁訴を示すこと、傍十二指腸乳頭憩室と胆石症の関連とその対応などを披瀝した。座長の労を執って頂いた兵頭前会長から、冒頭、PTCDで悪性閉塞性黄疸患者8カ月延命を報じた「経皮経肝胆道造影法」（臨床と研究・41巻12号）の胆道ドレナージは本邦の嚆矢であると紹介され、感動した。講演後は、会場の皆さんの了解のもと、恩師三宅先生の登壇をもとめ、万雷の拍手で先生が登壇され、記念写真撮影の機会もつくっていただいた。身に余る光栄であった。

最後は、久次武晴・大藤正雄両教授が採用された7題の口演によるシンポジウム「傍十二指腸乳頭憩室の臨床的意義と対応」で肝・胆・膵臓器関連の臨床的意義を整理して頂き、第25回節目の日本胆道学会学術集会を盛会裡に締めくくっていただいた。参会の皆様並びに関係各位に深甚の謝意をささげた。

運営は、主として教室員諸君の奮闘に依存した『手作りの学会』となった。私的な8ミリビデオで動画も遺した。数多くの先達や同輩の皆さんと動画のなかで再会できる。この上なく幸せな会長を経験させて頂いた。感謝申し上げます。



満席のパネルディスカッション（第一会場）俯瞰



会長講演後ステージで恩師三宅 博先生と座長の兵頭春夫前会長



第一会場の会長

第26回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：1990年9月28日（金）～29日（土）

会 場：東京：経団連会館

会 長：亀田治男
（東京慈恵会医科大学第1内科）

演題総数：190題



歴
代
会
長

開催内容

招待講演「Nonsurgical treatment of gallstones」—

Prof. Dr. Tilman Sauerbruch

会長講演「胆石症研究の歴史と展望」

胆石症調査委員会報告

主題

シンポジウム「胆石の成因と生成機序をめぐる諸問
題」

口 演 7題

追加発言 3題

パネルディスカッション

1「胆石分類法の問題点」

口 演 7題

追加発言 1題

2「胆石症の手術療法と非手術療法の選択」

口 演 11題

ワークショップ

1「胆石と胆嚢癌の因果関係について」

口 演 9題

追加発言 1題

2「胆汁排泄機構と異常胆汁」

口 演 9題

3「対外衝撃波胆石破碎療法の適応と評価」

口 演 10題

一般演題

口 演 137題

開催概要

第26回日本胆道学会総会が、平成2年9月28日、29日に東京都大手町の経団連会館において開催されることになりました。この総会が充実した学術集会となりますよう準備を進めて参りましたが、会員の皆様の御協力によりまして、多くの成果があげられますよう期待しております。

日本胆道学会の歩みを振り返ってみますと、第1回胆嚢造影研究会が開催されたのが1965年でありました。1969年からは胆道疾患研究会となり、さらに1982年から日本胆道疾患研究会と呼ぶようになりました。そして、1986年8月の第22回日本胆道疾患研究会に至るまで、毎年、内科、外科、放射線科、病理学などの専門家によって、活発な発表、討議が繰り返されて参りました。1986年には発展的に日本胆道学会となり、1987年8月に弘前市において日本胆道学会総会が開かれましたが、胆道疾患研究会当時からの通算番号を用い、第23回総会となりました。今回の日本胆道学会総会は第26回で、学会発足後4回目の総会ということになります。

日本胆道疾患研究会は他の学会があまり開かれておらず、行事も比較的少ない時を選び、毎年ほぼ8月下旬に開催され、昭和62年に日本胆道学会になってからも、その慣習が続けられてきました。しかし、平成2年8月下旬にはオーストラリアにおいて世界消化器病学会が開かれる関係もあり、また研究会ではなく学会になったという趣旨も含めて、9月下旬に開催することになりました。今後は8月を避けて、暫くは関連のある他学会の会期を勘案しながら適切な時期に開催され、やがて一定した会期に落ち着くと思います。

近年、胆道および胆道疾患に関する研究と臨床については、病態、診断、治療などの各方面において目覚ましい進歩をとげ、多くの医学者、臨床医家の注目を集めております。とくに胆石の生成機構や胆石症をはじめ、各胆道疾患の病態の解明、画像診断の進歩に伴う診断の飛躍的向上、胆汁酸製剤による経口の胆石溶解療法や体外式衝撃波胆石破碎法(ESWL)の臨床応用などが加わったことによる治療法の変貌などについて対応する必要があります。

今回の総会においては、これらの胆道疾患に関する研究や臨床の進歩に関する各方面からの発表に期待するとともに、活発かつ有意義な討論を重ねて頂

きたいと思います。日本胆道学会には内科、外科、放射線科、病理学など基礎、臨床にわたる方々が一堂に会しての切磋琢磨に、とくに意義があると思います。また、今回は、内科医である私が会長になりました機会に、胆石の生成機序や胆石分類法、胆汁排泄機構など基礎的な問題をも、積極的に主題として加えさせて頂きました。

治療に関しては、ESWL療法推進の役目を果たされてきたMunchen大学のSauerbruch教授の胆石症の非手術療法についての招待講演があり、またパネルディスカッションにおける日本の医師の、この問題に関する発表討論や、ESWLについてのワークショップに期待しております。胆石と胆嚢癌の関連は、いつの時代にも問題になっておりましたが、現時点における考え方や進歩を伺えると思います。

シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップなどを通して、新しい重要な課題を掘り下げてまとめて頂きたいと考え、従来よりこれらを多く設定致しました。2日間という限られた会期もあって3会場を使用することになりましたが、各会場は同じ館内にあって、その間の移動、連絡は容易です。できるだけ多くの人々に参加して頂きたいと念願しております。137題の一般演題も学会にとってきわめて重要な意義をもつものであり、大いに楽しみにしております。

日本胆道学会となってから、始めて東京において開催される第26回の本総会が、会員の皆様にとって意義の深い、実り多い学術集会となりますよう心から期待し、皆様の御協力をお願い致します。



第26回日本胆道学会会場(経団連会館)前にて。平成2年9月28日
亀田治男会長とProf. Dr. Tilman Sauerbruch

第27回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：1991年9月19日（木）～20日（金）

会 場：久留米市石橋文化センター

会 長：中山和道
（久留米大学第2外科）

参加人数：日本胆道学会会員及び会員外医師1,077名

演題総数：210題



歴
代
会
長

開催内容

会長講演「胆道癌の臨床」

中山和道/座長 佐藤寿雄（東北大学名誉教授）

招待講演「Spectrum of Treatment of Biliary Tract Carcinoma」

Associate Prof. Dr. Roger L. Jenkins

(Harvard Medical School, Deaconess Hospital)

/座長 宮崎逸夫（金沢大学第2外科）

特別講演「胆道系の構造と機能—病態との接点を求めて—」

谷川久一（久留米大学第2内科）

/座長 羽生富士夫

（東京女子医科大学消化器病センター）

トピックス

司会：松野正紀

シンポジウム

①「胆道癌の早期診断体系」

司会：有山 襄、田代征記

特別発言：大藤正雄、小野慶一

②「胆道癌治療の現況と将来の展望」

司会：永川宅和、二村雄次

特別発言：武内俊彦、水本龍二

パネルディスカッション

①「胆道ドレナージの方法・適応・問題点」

司会：高田忠敬、洪江 正

特別発言：菅田文夫、香月武人

②「急性胆嚢炎の治療法の選択」

司会：松代 隆、川原田嘉文

特別発言：大菅俊明、斎藤洋一

ワークショップ

①「胆道癌のリスクファクターと前癌病変」

司会：船曳孝彦、渡辺英伸

特別発言：武藤良弘

②「腹腔鏡下胆嚢摘出術」

司会：木村 健、山川達郎

特別発言：辻井 正

③「胆石の画像診断」

司会：土屋幸浩、跡見 裕

特別発言：兵頭春夫

④「乳頭部癌の進展度診断」

司会：中澤三郎、中村光司

特別発言：大井 至

⑤「切除不能胆道癌に対する減黄処置の選択」

司会：碓井貞仁、須山正文

特別発言：柿田 章

開催概要

主題は私のライフワークの一つである「胆道悪性疾患」であるが、良性疾患もとりあげている。悪性疾患は、シンポジウムでは①胆道癌の早期診断体系 ②胆道癌の治療の現況と将来の展望、パネルディスカッションでは①胆道ドレナージの方法、適応、問題点、ワークショップでは①胆道癌のリスクファクターと前癌病変 ④乳頭部癌の進展度診断 ⑤切除不能胆道癌に対する減黄処置の選択。良性疾患としてはパネルディスカッション ②急性胆嚢炎の治療法の選択、ワークショップ ②腹腔鏡下胆嚢摘出術 ③胆石の画像診断、と現時点でもっとも興味をもたれている三題のみとした。

本学会は胆道疾患の専門医の集まりであり、それぞれの題目について深く掘り下げた討議を行って頂くため、口演はシンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップとし、一般演題はすべて展示、展示の中から優秀な演題を選んでさらに討論することにした。したがって十分な討論の時間を取ること

ができた。意図した通り、各会場、ホットな実りある討論が出来たと自負している。

招待講演は欧米で積極果敢に手術を行っている若手胆道専門外科医の中より、名古屋大学二村雄次助教授のお勧めもあり、Harvard Medical School Deaconess Hospital (Boston) のHepatobiliary Surgeryの主任であるRoger L. Jenkins Associate Professorに白羽の矢を立て「Spectrum of Treatment of Biliary Tract Carcinoma」という演題で講演をして頂いた。

私の会長講演は、当科における胆道癌手術例693例について、診断、治療上の問題点と切除例の治療成績を「胆道癌の臨床」という演題で講演した。

外科、内科、放射線科、病理の胆道専門の医師、九州地区の胆道疾患に興味をもった会員外医師、1,077名の参加をいただき、活気あふれた有意義な学会であったと自賛しております。



Jenkins教授夫妻、二村雄次・近藤 哲先生らと。



展示の中から優秀な演題を選んで討論。ホットな実りある討論が行われた。



ワークショップ5「切除不能胆道癌に対する減黄処置の選択」



谷川久一・亀田治男・Jenkins・佐藤寿雄・永光慎吾先生。

第28回

日本胆道学会総会開催概要

テーマ：『胆道疾患の診断と治療のさらなる進歩を目指して』

会期：1992年9月16日（水）～17日（木）

会場：ホテルオークラ東京

会長：有山 襄
(順天堂大学消化器内科教授)

プログラム委員：大井 至、大菅俊明、菅田文夫、高田忠敬、土屋幸浩、
二川俊二、山川達郎

参加人数：961名

演題総数：191題



歴代会長

開催内容

- | | | | |
|---------------|--|--------------------|------------|
| 特別講演 | 胆嚢癌の発育・進展の特徴 | 特別発言 | 宮崎逸夫 |
| | 渡辺英伸 | | |
| | 座長 水本龍二 | パネルディスカッション | |
| 会長講演 | 胆道癌の画像診断と治療成績 | 胆嚢結石の治療法の選択 | |
| | 有山 襄 | 司会 | 高田忠敬、鈴木範美 |
| | 座長 中山和道 | 特別発言 | 亀田治男 |
| 招待講演1 | CT and Ultrasound Evaluation of Cholangiocarcinoma | ワークショップ | |
| | Thomas L. Lawson, M.D. | 1 胆道癌の自然史 | |
| | Professor and Chairman, Department of Radiology, Loyola University Medical Center, Maywood, Illinois, USA | 司会 | 武内俊彦、鈴木 敏 |
| | 座長 齊藤洋一 | 2 胆道疾患と内視鏡 | |
| 招待講演2 | Modern Insights of Diagnostic/Therapeutic Interventional Procedures of the Biliary Tract | 司会 | 大井 至、池田靖洋 |
| | Jaques WAJ Reeders, M.D., Ph.D. | 3 横断画像による胆道疾患診断の進歩 | |
| | Head, Department of Gastrointestinal Radiology, Academisch Ziekenhuis bij de Universiteit van Amsterdam, The Netherlands | 司会 | 打田日出夫、木南義男 |
| | 座長 田島芳雄 | 4 胆道癌早期診断の現況 | |
| シンポジウム | | 司会 | 中澤三郎、川原田嘉文 |
| 1 門脈圧亢進症と胆道疾患 | | 5 胆道疾患と先端技術 | |
| | 司会 大菅俊明、二川俊二 | 司会 | 山中桓夫、渡辺五朗 |
| 2 肝門部胆管癌をめぐって | | | |
| | 司会 土屋幸浩、二村雄次 | | |

開催概要

特別講演は当時トピックスであった早期胆嚢癌の診断と治療に関連して、渡辺教授に胆嚢癌の発育・進展について詳細な講演をしていただいた。

会長講演は自験例から無症状胆石は胆嚢癌合併率が低いこと、早期胆嚢癌は5年生存率100%であること、無黄疸胆管癌は必ずしも早期癌ではないことなどを述べた。

招待講演はProf. LawsonとDr. ReedersにUSAとヨーロッパにおける胆道癌の診断の現況を講演していただいた。これらの講演から日本の胆道疾患の研究は世界でトップクラスであることが再確認された。

シンポジウム1では門脈圧亢進症に合併する胆石症の成因と治療が主に討論された。

シンポジウム2では肝門部胆管癌の病理型と進展様式、画像診断による存在・進展度診断、手術と集学的治療の進歩が議論された。

パネルディスカッションでは当時多様化した胆嚢結石の治療法の適応が各施設によって異なることから経口溶解法、直接溶解法、ESWL、腹腔鏡下胆摘術、ミニラパトミーによる胆摘術、従来の開腹術による胆摘術がエキスパートによって各治療法の意義が討論された。

ワークショップはupdateな話題を取り上げ、新進気鋭の先生方に発表いただき、今後の研究の発展に寄与するものと考えられた。

第28回日本胆道学会総会は多大な成果を挙げて盛会裏に終了した。会員の皆様のご協力に深謝申し上げる次第である。



パネルディスカッション。錚々たるパネリストの先生方。



懇親会で胆道学会の主だった先生方。皆さんまだお若い。



Prof. Lawson, Dr. Reedersご夫妻と恩師故白壁彦夫先生。

第29回

日本胆道学会総会開催概要

歴
代
会
長

会 期：1993年9月20日（月）～22日（水）
＜1993年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1993＞

会 場：神戸 ポートピアホテル

会 長：高田忠敬
（帝京大学医学部第一外科 教授）

プログラム委員：跡見 裕、安藤久實、井上一知、打田日出夫、沖永功太、
鎌野俊紀、川原田嘉文、木村泰三、小山研二、鈴木 茂、
鈴木範美、菅田文夫、高見 博、滝川 一、土屋幸浩、
戸松 成、中澤三郎、平田公一、堀口祐爾、松代 隆、
宮川秀一、山下裕一、竜 崇正、渡辺伸一郎

参加人数：DDW-Japan 1993参加者 約9,000人

演題総数：245題



開催内容

特別講演

「毛細胆管胆汁の形成とその異常」

山中正己

会長講演

「PTCD—そのはじめてから発展—」

高田忠敬

鼎談

「肝門部胆管癌治療の今昔」

都築俊治 二村雄次 宮崎 勝

司会：水本龍二（三重大学第一外科）

Meet the Expert

「胆道の研究の進歩」

1. 胆石の生成
2. 胆道内視鏡
3. 胆嚢癌の治療 一癌進展からみた合理的治療法

シンポジウム

「胆道癌基礎から臨床へ」

1. 病態解析の基本的アプローチ
2. 各種診断法による胆道癌進行度の判定
3. 各種治療法の適応と限界

胆道学会・消化器病学会合同シンポジウム

「胆汁うっ滞をめぐって 一肝と胆道の接点」

胆道学会・膵臓学会 合同シンポジウム

「胆道・膵臓の機能と消化管ホルモン」

胆道学会・膵臓学会・消化器内視鏡学会 合同シン

ポジウム

「良性胆道・膵臓疾患の内視鏡と内視鏡下治療」

1. 胆道・膵臓の内視鏡
2. 腹腔鏡下手術の進歩

ワークショップ

1. 胆管拡張症をめぐって
2. 胆道疾患における実験モデルと臨床との関連
3. 胆石除去法
4. 黄疸肝の病態と治療法の選択

ラウンドテーブル

1. 胆道癌の基本的アプローチ
2. 胆道癌の進行度と診断法（1）
3. 胆道癌の進行度と診断法（2）
4. 胆道癌の治療法の適応と限界
5. 胆管拡張症と発癌
6. 胆管拡張症の形態
7. 胆管拡張症の治療
8. 胆道疾患の実験的研究
9. 胆石除去法 一ESWL・溶解剤
10. 胆石除去法 一内視鏡下切石
11. 閉塞性黄疸の病態と治療
12. 黄疸肝の病態と治療
13. 胆道疾患 一成因・診断法

一般演題（ポスター）

開催概要

私は、第29回日本胆道学会の会長（当時の写真）を拜命いたしました。間もなく、山口大学内科の竹本忠良教授から電話がありました。趣旨は、「学会開催について重要な話があるので時間を作ってもらえないか」ということでした。新しい学会スタイルを一緒につくろうではないか、ということが伝えられました。竹本教授には、以前、東京女子医科大学消化器病センターで消化器内視鏡ならびに消化器病の基本を教えていただき、大変可愛がっていただいていたので断ることはできませんでした。

間もなく、東京、新橋の料亭で、竹本忠良教授の下に第35回日本消化器病学会大会 会長 吉田豊、第24回日本膵臓学会大会 会長 原田英雄、第29回日本胆道学会総会 会長 高田忠敬、第46回日本消化器内視鏡学会総会 会長 藤田力也、第31回日本消化器集団検診学会秋季大会 会長 河村 奨、第48回日本大腸肛門病学会総会 会長 宇都宮讓二が集まった。

竹本教授からは、これからは日本でもアメリカで行われているような消化器病に関連する学会が一同に集まって行う学会、DDW-Japanを作ろうではないかということであった。また、このような大型の学会を行うことにより会員の重複する学会にそれぞれ参加するような手間も避けられるし、学会同士の横のつながりも大きくなるメリットがあろう。さらに、これからは大きな学会に対応できる学会屋を育てることもできるだろう、ということ強調してい

た。大変大きな構想でしたが、その夜は、全員が一致するには至らず、今後、参加が予定される6学会の会長同士で討議を続けようということになった。

それからは、学会の時期、場所、学会の開催スタイル、学会ロゴの決定などに関して、十回以上の集会を全国各地で行った。いずれも、喧々囂々（それぞれの学会が自分の学会の独自性や権利などを主張するので）の会議であったが、何回も顔を合わせ話し合ううちに折り合いがつくようになり、ようやく、1993年9月に神戸での開催が決定した。神戸の選択は、ポートピアホテルを中心に国際会議場などが隣接しており、この大型の合同学会開催に最も適しているのではないかとということであった。

第一回のJ-DDWは、9,000人を超える参加者で、人にあふれている感じがしました。

私どもの日本胆道学会は口演が、ポートピアホテルで行われ、ポスターは、他の学会と同じく隣接する国際会議場で行われました（写真）。会長講演は、私のオリジナルである「PTCD—そのはじめから発展」を話しました。人また人の中で学会が行われ、大変感動したのを覚えております。海外からの参加者も多く、いかにもDDWという感じでした。



写真：第29回日本胆道学会記念カード

第30回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：1994年4月23日（土）～25日（月）
＜1994年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1994＞

会 場：神戸：神戸ポートアイランド

会 長：梶山梧朗
（広島大学医学部第1内科）

プログラム委員：石原扶美武、大井 至、大菅俊明、古味信彦、鈴木範美、
谷村 弘、土屋幸浩、中山和道（五十音順）

参加人数：DDW-Japan 1994参加者 9,400名

演題総数：200題



歴
代
会
長

開催内容

特別講演「動物の進化と胆汁酸」

穂下剛彦

特別発言：亀田治男、香月武人

会長講演「コレステロール胆石……予防の可能性を
求めて」

梶山梧朗

II「胆道悪性閉塞の治療」—胆道学会・膵臓学会・
消化器内視鏡学会合同

口 演 10題/特別発言 1題

司会：中山和道、大井 至

特別発言：羽生富士夫、有山 襄

主題

シンポジウム

I「胆石発生機序の新しい展開」—胆道学会・消化器
病学会合同

口 演 6題/特別発言 1題

司会：鈴木範美、田妻 進

特別発言：菅田文夫

II「合流異常と胆道癌の発生機序をめぐって」—胆
道学会・消化器内視鏡学会合同

口 演 5題/追加発言 5題/特別発言 1題

司会：古味信彦、須田耕一

特別発言：水本龍二、渡辺英伸

III「胆嚢結石の治療・私の選択」—胆道学会・消化
器内視鏡学会合同

口 演 5題

司会：大菅俊明、松代 隆

ワークショップ

I「総胆管結石の治療法の選択」—胆道学会・消化器
内視鏡学会合同

口 演 6題/追加発言 4題/特別発言 1題

司会：谷村 弘、藤田力也

特別発言：中澤三郎、宮崎逸夫

パネルディスカッション

I「胆石の分類をめぐって—肉眼分類から画像診断
まで—」

口 演 12題/特別発言 1題

司会：土屋幸浩、斉藤和好

II「胆嚢小隆起性病変をめぐって」—胆道学会・消
化器内視鏡学会合同

口 演 6題/追加発言 4題/特別発言 1題

司会：石原扶美武、高田忠敬

特別発言：武内俊彦

一般演題 150題

開催概要

第30回日本胆道学会総会は平成6年4月22日から

26日まで、第2回日本消化器関連週間に参加する形

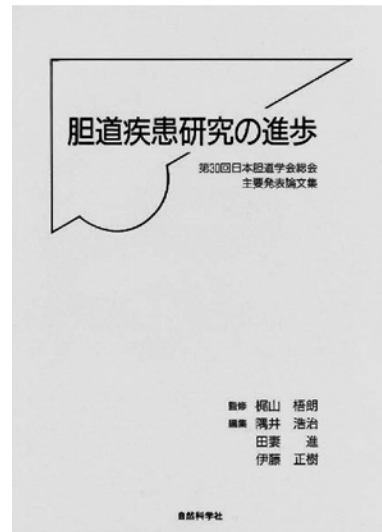
で、神戸ポートピアホテルで行われた。1つの特別講演、2つのシンポジウム、3つのパネルディスカッション、2つのワークショップを取りあげたが、その大部分に対して、他学会から合同企画のお誘いをいただき、他学会会員からの関心も強かったことに、会長として心から嬉しく、満足させていただいた。

我々は21世紀を間近にしているが、その時期に当たって生化学分野や超音波X線、CT、MRIなどを含む画像医学などが、これまでにみられない発展を遂げた。また治療面においても、内視鏡による手法、衝撃波の応用などが急速に進歩を遂げたことも、周知のとおりである。消化器病学の中でも胆道病学は、これらの手法をいち早く積極的に且つ十二分に取り入れ、遺憾なく臨床的価値を発揮したことは、特筆すべきことではないかと思われる。

本書を繙いていただければ、お解りのことと思うが、本書は、現在我国で最も進んだ知識と最も高度な技術を駆使し得る立場にある方々による、胆道疾患の成因論や、その診断および治療法を中心とした内容を濃縮したものである。著者本人は元より、これから胆道病学を学ぼうとする後輩の方々にも、大いに役立てていただける書であることを確認する。

日本胆道学会は、その前身である日本胆道疾患研究会であった時代に、私の前任者である三好秋馬広島大学名誉教授が会長をされ、広島の地において研究集會が開催されたことを、記憶されておられる方もあると思っている。前任者と私、二代にわたり、本会をお世話させていただいたことは、私共にとってこの上ない幸せに思う次第である。また三好会長による日本胆道疾患研究会開會に当たり、着任後まだ日の浅かった三好教授を、講座を越えてその運営に献身的努力をして下さった広島大学第二外科 故児玉求助教授の霊前に、この機会に改めてお礼を申し上げ、冥福を祈りたい。

なお、本書の体裁を整える目的で、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップなどの名称をはずし、順序も関連項目に配慮して掲載したことをお断りしておく。



第31回

日本胆道学会総会開催概要

テーマ：『胆道疾患の現状とその展開』

会期：1995年5月9日（火）～12日（金）
＜1995年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1995＞

会場：パシフィコ横浜

会長：鈴木範美
（東北大学医療技術短期大学部 教授）

プログラム委員：大井 至、大菅俊明、柿田 章、梶山梧朗、小林絢三、小山研二、
高田忠敬、谷村 弘、土屋幸浩、松代 隆、山川達郎

参加人数：DDW-Japan 1995参加者 9,121名

演題総数：232題



歴
代
会
長

開催内容

特別講演「胆道閉鎖症の長期成績」

大井龍司

会長講演「胆石症の研究—問題点とその展開」

鈴木範美

特別シンポジウム

「消化器疾患の保険診療上の問題点」

＜DDW-Japan 1995全体企画＞

司会：比企能樹、藤野雅之

主題

シンポジウム

1. 「胆道精査法の現況と問題点」

（胆道学会・消化器病学会合同）

司会：梶山梧朗、高田忠敬

2. 「胆道癌の長期生存例からみた診断・治療法の選択」

司会：柿田 章、土屋幸浩

3. 「腹腔鏡下手術の新たな展開」

（消化器内視鏡学会・消化器病学会・

胆道学会・消化器外科学会合同）

司会：馬場正三、出月康夫

パネルディスカッション

1. 「胆内結石症についての最近の知見」

司会：大菅俊明、谷村 弘

2. 「長期観察例からみたESTの功罪」

司会：山川達郎、税所宏光

ワークショップ

1. 「胆管ステントをめぐる」

司会：松野正紀、跡見 裕

2. 「胆嚢癌の診断と治療における新しい展開」

（消化器病学会・胆道学会・消化器外科学会合同）

司会：嶋田 紘、山中桓夫

3. 「膵胆道の良悪性境界病変」

（膵臓学会・胆道学会合同）

司会：渡辺英伸、諸星利男

4. 「胆道系の神経支配とNeuropeptide」

司会：小山研二、中沼安二

開催概要

第31回日本胆道学会総会は、1995年日本消化器関連学会週間（DDW-Japan 1995）として、消化器関連の9学会が一同に会して学会を開催しました。全面参加学会は、第26回日本膵臓学会大会（会長 有山 襄）、第49回日本消化器内視鏡学会総会（会長 金子栄蔵）、第81回日本消化器病学会総会（会長 斉藤洋一）と本会の4学会で、他の5学会が部分参加する大規模な学術集会となりました。

従って、主題などは工夫を加え各学会の自主性を尊重しながら全体として統一性を持たせたという特徴がありました。日本胆道学会は、シンポジウムに「胆道癌」をとりあげ、診断・検査法の問題と長期生存例の分析から治療法の選択について論じていただきました。パネルディスカッションは厚生省特定疾患の肝内結石症をとりあげ、本症の実状とその病態・治療の検討を、また内視鏡下乳頭切開による切石や胆道ドレナージの長期的予後評価について討論していただきました。ワークショップは胆道ステントの問題点とその対策を、また胆道系の神経支配とNeuropeptideでは新知見の発表を期待しました。

各テーマの詳細は、シンポジウムとして①「胆道精査法の現況と問題点」、②「胆嚢癌の長期生存例からみた診断・治療法の選択」、③「腹腔鏡下手術の新たな展開」の3題。パネルディスカッションは①「肝内結石症についての最近の知見」、②「長期観察例からみたESTの功罪」の2題。ワークショップは、①「胆道ステントをめぐる」、②「胆嚢癌の診断と治療における新しい展開」、③「膵胆道の良悪性境界病変」、④「胆道系の神経支配とNeuropeptide」の4題としました。

シンポジウム3題は、24演題に追加発言8題の計

32演題、パネルディスカッション2題は、13演題に追加発言5題の計18演題、ワークショップ4題は36演題が採用されました。なお、合同プログラムには、シンポジウム2題とワークショップ2題に参加しました。

特別シンポジウム「消化器疾患の保険診療上の問題点」では、厚生省、日本医師会、胆道学会ほか8学会代表による11施設の演題が企画されました。

一般演題は口演143題で、うち106題は日本消化器病学会で展示としても発表されました。口演の内容は、胆道癌の診断23題、治療関係27題、長期生存例の検討が27題、胆石症など良性疾患の病態・治療等に関するもの52題の計143題でありました。

特別講演は「胆道閉鎖症の長期成績」と題して、大井龍司教授（東北大学医学部小児外科）に、小児消化器外科領域で最も治療困難な疾患についてご講演いただきました。会長講演は「胆石症の研究一問題点とその展開」について、とくに色素系胆石（ビリルビン石灰石、黒色胆石）の基礎的研究と胆汁うっ滞に関する十二指腸乳頭部周辺の病態・生理について講演しました。

DDW-Japan 1995の一環として開催された日本胆道学会は、他学会との合同企画のため発表演題の重複が避けられ、学術面ではより高い内容となり、会員相互の自由な討論で内容は一段と充実したものになったと思います。有意義なDDW-Japan 1995であったことを関係各位に感謝しています。

なお、社会的には大きな出来事、とくに1月に阪神淡路大震災が、3月には地下鉄サリン事件が起こった直後に学会は開催されました。幸い横浜市で円滑に運営されました。以上



DDW-Japan 1995の記念テレホンカード

第32回

日本胆道学会総会開催概要

歴代会長

会 期：1996年4月19日（金）～20日（土）
＜1996年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1996＞

会 場：ポートピアホテル、神戸国際会議場

会 長：大井 至
（東京女子医科大学第二病院中央検査部 教授）

プログラム委員：跡見 裕、有山 襄、高田忠敬、武内俊彦、谷村 弘、
土屋幸浩、中澤三郎、羽生富士夫、堀口祐爾、山川達郎

参加人員：DDW-Japan 1996参加者 11,323名

演題総数：196題



開催内容

会長講演：「膵・胆管合流異常の発生に関する私見」

司会：羽生富士夫

特別発言：菅田文夫

プレナリーセッション 4題

主題

司会：井戸健一・戸松 成

シンポジウム 33題

コメンテーター：宮崎逸夫・大藤正雄・

9「胆道疾患と消化管との相関」（胆道学会・消化器病学会合同）12題

高田忠敬・藤田力也

一般演題（口演）130題

司会：谷村 弘、梶山悟朗

司会：田代征記、小川研二、柿田 章、平岡武

特別発言：大菅俊明

久、嶋田 紘、二川俊二、吉川達也、武

11「胆・膵疾患における分子生物学的研究とその臨床応用」（膵臓学会・胆道学会合同）10題

藤良弘、須山正文、向井秀一、関 秀一、

司会：小川道雄、加藤 洋

竜 崇正、須田耕一、松本由朗、船曳孝

特別発言：本間達二

彦、中島正継、土岐文武、斎藤和好、打

15「早期胆嚢癌の診断—表面型早期胆嚢癌の診断をめざして—」11題

田日出夫、平田信人、田尻 孝、万代恭

司会：有山 襄、河原田嘉文

嗣、炭山嘉伸、櫻井幹己、鈴木範美、吉

パネルディスカッション 29題

田奎介、田中直美、小林展章、松代 隆、

9「胆嚢胆管結石の治療方針」11題

中山和道、内村正幸

司会：山川達郎、山雄健次

特別発言：池田靖洋

14「胆嚢温存療法の功罪」10題

司会：土屋幸治、跡見 裕

15「細径プローブによる胆道超音波診断の意義」（胆道学会・消化器内視鏡学会合同）8題

司会：二村雄次、堀口祐爾

ワークショップ 10題

8「胆砂・胆泥の病態と臨床的評価」

司会：石原扶美武、渡辺五郎

開催概要

第32回日本胆道学会総会は、DDW-JAPAN 1996 Kobeとして行われました。1995年1月17日の阪神淡路大震災の翌年であり、会員の皆様には色々ご迷惑をお掛けするとは思いつつ、震災からの復興の一助となればとあえて神戸で開催されました。ご参集いただいた会員の皆様もまだ残る震災の爪跡を見られ心が痛んだことと思います。

DDW-JAPANもまだ4回目であり、多くが手探り状態でした。プログラム編成は他学会と協調して行われましたが、胆道学会としては、一般演題を重視する従来の立場をなんとか確保しました。演題の帰属、プログラム編成、ビジネスミーティングなど学会としての独自性をいかに確保するかが次第に問題となってきたようであります。

シンポジウムは、消化器病学会と合同で「胆道疾患と消化管との相関」、膵臓学会と合同で「胆・膵疾患における分子生物学的研究とその臨床応用」、そして独自に「早期胆嚢癌の診断—表面型早期胆嚢癌の診断を目指して—」の3題、パネルディスカッションは、消化器内視鏡学会と合同で「細径プローブによる胆道超音波診断の意義」、胆道学会として、常に内科・外科、内科的手技、手術術式が議論となる「胆嚢胆管結石の治療方針」、そしてこれも議論の多い「胆嚢温存療法の功罪」の3題を、ワークショップには、「胆砂・胆泥の病態と臨床的評価」と、いずれも本学会の独自性を強く意識したテーマを取り上げました。これらのテーマを解明することがまさに本学会の責務であると感じております。一般演題は、2会場を使い、発表6分、討論4分と出来るだけ時間を取るよういたしました。一般演題は、悪性腫瘍（病理組織・遺伝子・P53・放射線治療・手術I、II、III）画像診断I、II、III、IV 合流異常I、II 内視鏡治療I、II、III スtentI、II ラパコレI、II 炎症 生理・病態生理I、II 胆石（成因I、II・治療I、II）症例I、II、IIIなどでした。DDW-JAPANでの開催ということで、参加人員も1万人を超えており、各会場は盛況で、活発な討論が行われていました。



パネルディスカッション14「胆嚢温存療法の功罪」



シンポジウム15「早期胆道癌の診断—表面型胆嚢癌の診断をめざして—」

第33回

日本胆道学会総会開催概要

歴
代
会
長

テーマ：『最新の診断と治療を一堂に』

会 期：1997年4月17日（木）～20日（日）
＜1997年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1997＞

会 場：名古屋国際会議場

会 長：谷村 弘
（和歌山県立医科大学 第2外科 教授）

プログラム委員：DDD-Japan1997総務委員会

参加人数：DDW-Japan 1997参加者 11,428名

演題総数：233題



開催内容

招待講演「Biliary tract cancer : comparative epidemiology, natural history and response to treatment」

RD Soloway

会長講演「成分分析からみた肝内結石の成因」

谷村 弘

教育講演「腹腔鏡下手術」

山川達郎

シンポジウム（35題）

1「消化器疾患と分子生物学—診断と治療の可能性—」

司会：寺野 彰、長町幸雄

2「3次元画像を用いた診断法の意義」

司会：神津照雄、芳野純治

3「胆嚢癌—進展度診断と治療方針」

司会：有山 襄、二村雄次

4「無症状胆石の取り扱い」

司会：梶山悟朗、鈴木範美

パネルディスカッション（21題）

1「肝内結石症の治療法—私の主張—」

司会：土屋幸浩、小林展章

特別発言：大藤正雄

2「悪性胆道閉塞に対する減黄術の手法と功罪」

司会：藤田直孝、柿田 章

特別発言：高田忠敬

ワークショップ（29題）

1「non-ESTによる胆管結石の治療」

司会：池田靖洋、平田信人

2「胆嚢機能の判定をめぐる諸問題」

司会：石原扶美武、井上一知

3「腹腔鏡下胆嚢摘出術の遠隔成績の評価」

司会：木村 健、嶋田 紘

特別発言：山川達郎

4「無石胆嚢炎の診断と治療」

司会：関 秀一、船曳孝彦

特別発言：内村正幸

プレナリーセッション（5題）

総合司会：内村正幸

司会：宮治 眞、中尾昭公

コメンテーター：岡崎和一

開催概要

第33回はDDWJの一環として開催される5年目であり、DDWJの利点を極力前面に押し出すことに留意した。それ故、4月5日（土）にも名古屋でDDWJ1997記念講演会が開催された。

テーマを「最新の診断と治療を一堂に」とした。主題は、胆道疾患に対する最新の診断と治療に直結するテーマとし、「分子生物学からみた診断と治療の可能性」など、新しい基礎的なテーマや、臨床の実際に役立つものとして、「3次元画像を用いた診断法」「胆嚢癌の診断と治療」「悪性胆道閉塞に対する減黄術」「腹腔鏡下胆嚢摘出術の遠隔成績の評価」などをシンポジウム4題、パネルディスカッション2題、ワークショップ4題として取り上げた。

招待講演として、コレステロール胆石の成因の研究については第一人者で、ペンシルバニア大学時代に京都大学外科学研究室へ毎日通って2,500例以上の手術記録と摘出胆石の分析データから自ら論文を纏めるなど、日本の胆石患者の現状をよく理解しているRD Soloway教授（テキサス大学）に、少し視点を変えて「合併する胆道癌における胆管粘膜の病理学的な最新の知見」について講演を依頼した。

会長講演は、4年間、厚生省特定疾患である肝内結石症調査研究班の班長を務めた関係上、「成分分析からみた肝内結石症の成因」とした。

その間、胆道疾患に対する治療の進歩のうち、外科では腹腔鏡下手術が胆嚢結石症に対する主たる手術術式として定着したとの認識で、教育講演に取り上げた。

演題は300題を超える応募があり、主題のほか一般演題140題を選択し、活発な討論を期待して、すべて口演とした。

参加した全学会の抄録は印刷不可能と考え、DDWJとして初めてプログラムと抄録をCD-ROMにして全会員に配布した。

ランチョンセミナーが少なかった時代なので、1号館1階のイベントホールはポスター会場に使用した関係で参加者の昼食用弁当を食べる場所がなく、中庭に急遽テントを張り、臨時食堂とした。毎日、弁当の数が不確実で予定数が無事に届けられるかハラハラしたが、雨が降らなくてよかった。

とくに勤務医のみならず、開業医や医学生にも広

く参加できるように、日本胆道学会の主たる会期を4月19日の土曜日と20日の日曜日に設定し、当日の会場はすべて満員であった。



会長講演「成分分析からみた肝内結石の成因」



招待講演を行ったRD Soloway教授夫妻



学会スタッフ

第34回

日本胆道学会総会開催概要

歴代会長

会 期：1998年4月15日（水）～18日（土）

会 場：パシフィコ横浜

会 長：藤田力也
（昭和大学藤が丘病院内科）

参加人数：DDW-Japan全体で11,585人



開催内容

特別講演「胆嚢胆石症の超音波による診断と治療選択をめぐって」

土屋幸浩

招待講演「Biliary Endoscopy for Treatment of Malignancy of the Bile Duct」

Claude Liguory M.D.

会長講演「胆道疾患における内視鏡の役割」

藤田力也

シンポジウム

4「消化器癌の遺伝子診断の問題点」

（消化器病・肝臓・消化器内視鏡・膵臓・胆道・
消化器外科・大腸肛門病学会合同）

11「胆道閉塞機転に対する治療方針」

12「総胆管結石の治療方針をめぐって」

パネルディスカッション

1「臨床試験（新GCP）をめぐる諸問題」

（DDW）

8「肝門部胆管癌の治療方針」

（胆道・肝臓・消化器外科学会合同）

9「原発性硬化性胆管炎の診療動向」

ワークショップ

4「免疫学的機序による胆管障害1診断と治療」

（肝臓・胆道学会合同）

7「肝画像診断の進歩」

（肝臓・消化器病・胆道・消化器外科学会合同）

10「胆膵腫瘍の新しい診断法」

（消化器病・膵臓・胆道・消化器外科学会合同）

12「選考演題」

プレナリーセッション

一般演題（ビデオ）

一般演題



第35回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：1999年10月28日（木）～31日（日）
＜1999年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 1999＞

会 場：広島国際会議場、広島厚生年金会館、アステールプラザ、
広島県立総合体育館

会 長：船曳孝彦
（藤田保健衛生大学医学部外科 教授）



プログラム委員：跡見 裕、安藤久實、石原扶美武、今泉俊秀、打田日出夫、
大井 至、尾形佳郎、柿田 章、川原田嘉文、小山研二、
税所宏光、須田耕一、須山正文、関 秀一、高橋 伸、田代征記、竜 崇正、土屋幸浩、
角田 司、中尾昭公、永川宅和、平田公一、藤田直孝、二川俊二、堀口祐爾、真口宏介、
宮川秀一、山雄健次、山川達郎、吉田奎介

参加人数：DDW-Japan 1999参加者 11,648人

演題総数：268題

開催内容

特別講演「胆道癌登録成績からみた胆道癌治療の実態」

永川宅和

招待講演1「Laparoscopic Cholecystectomy」

Lawrence W. Way, M.D., FACS

招待講演2「An Update of the Diagnostic Role of ERCP for the Management of Biliary Disease」

Choichi Sugawa, M.D., Kunio Ukawa, M.D., and
Daisuke Higuchi, M.D.

会長講演「胆管十二指腸端側吻合術をめぐる」

船曳孝彦

教育講演「消化器疾患診療の最近の進歩」

9「胆嚢炎と胆管炎の診断と治療」

内村正幸

シンポジウム

3「消化器疾患の鏡視下手術—反省と展望」

8「臨床応用可能な分子生物学」

12「ss胆嚢癌の診断と治療」

13「肝内胆管の拡張はどうして起こるのか」

17「超音波診断で発見される胆・膵癌の実態」

18「胆石治療法からみた再発例」

パネルディスカッション

3「胆汁酸代謝研究の新しい展開」

9「胆道癌リンパ節転移の診断と治療方針」

11「消化管と肝・胆・膵—臓器相関」

14「膵・胆管合流異常における発癌機序」

ワークショップ

7「胆汁の分泌から濃縮・排泄まで」

10「胆道癌非切除例の治療法の選択」

ビデオワークショップ

2「内視鏡的拡張術の手法と成績—消化管・胆・膵」

4「胆・膵の3D画像の進歩—virtualを含む」

国際シンポジウム

2「黄疸と胆汁うっ滞—その基礎と臨床」

Jaundice and Cholestasis

Recent advances in basic science
and clinical implication—

プレナリーセッション

一般演題

開催概要

DDWJ1999の一環として広島で行われた。部分参加を含め9学会が結集しDDWとして行われるという特性を生かそうと、DDW運営委員会では、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップ、など特別演題は、参加各学会互いに相乗りの形で合同企画としてプログラミングした。たとえば本学会のテーマ『胆道癌リンパ節転移の診断と治療方針』には消化器外科学会が加わり、肝臓学会が提案した『胆汁酸代謝研究の新しい展開』に本学会と消化器病学会が加わって、合同企画プログラムが生まれた。

せっかく消化器疾患を研究する多くの学会が結集しているのだから、参加会員は他学会の最先端、考え方を知ってもらおうと積極的に合同企画に参加した。

結局シンポ19（うち胆道学会参加は6）パネル14（うち4）ビデオワークショップ6（うち2）ワークショップおよびビデオワークショップ8（うち4）さらにDDWJ全体企画の国際シンポジウム、教育講演もあって4日間の会期は盛大であった。

胆道癌登録は当時胆道外科研究会が集計していたが、集計の中心的存在の永川先生に特別に胆道学会で講演していただいた。

海外からの招待講演には胆管十二指腸再建術を早くから発表されていたWay先生と、アメリカで大変活躍されている須川暢一先生をお願いした。

会長講演としては胆管十二指腸吻合を胆道再建としてばかりでなく、乳頭形成術や胆管空腸吻合術に替わる術式として、導入した最初の外科医としての経験と考え方を集大成として述べさせて戴いた。

第36回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：2000年10月26日（木）～27日（金）
＜2000年日本消化器関連学会週間DDW-Japan 2000＞

会 場：神戸国際会議場・ポートピアホテルほか

会 長：税所宏光（千葉大学医学部第一内科）

プログラム委員：乾 和郎、大井 至、柿田 章、川原田嘉文、須山正文、田妻 進、
藤田直孝、二川俊二、船曳孝彦、竜 崇正、渡辺五朗

参加人数：DDW-Japan 2000参加者 12,541名

演題総数：259題



開催内容

特別講演「胆汁酸の腸肝循環と機能」

牧野 勲

司会 二川俊二、田妻 進

会長講演「肝内胆石症の病態と治療—経口の胆道鏡
治療の適応、有効性、問題点—」

税所宏光

ワークショップ

・「肝胆膵診療における画像診断の進歩」*

司会 坂口正剛、乾 和郎

特別発言 跡見 裕

教育講演（DDW-Japan：消化器病として21世紀の
展望と期待）

「急性胆管炎の治療—閉塞レベルと原因に応じた対
処法—」

田中雅夫

・「QOLを考慮した消化器癌治療」*

司会 貝原信明、岡崎幸紀

・「原発性硬化性胆管炎と炎症性腸疾患」*

司会 日比紀文、滝川 一

主題

シンポジウム

・「内視鏡診断・治療の最先端」*

司会 竜田正晴

・「Virtual Endoscopy はどこまで進歩したか」*

司会 芳野純治、今井 裕

・「経乳頭的な各種胆道アプローチに伴う膵炎合併
症の実態と予防対策」

司会 大井 至、跡見 裕

・「肝門部胆管癌の治療—長期生存の要因をさぐ
る—」

司会 川原田嘉文、高田忠敬

・「胆嚢癌の発生と早期診断」

司会 渡辺英伸、渡辺五朗

・「膵胆疾患と分子生物学」*

司会 今村正之、大槻 眞

・「MRCPによる膵・胆道疾患とそのピットフォール」

司会 須山正文、古川敬芳

・「胆嚢結石合併総胆管結石治療のストラテジー」

司会 船曳孝彦、中島正継

ビデオワークショップ

・「胆道疾患の診断と治療に関する新たなアプローチ」

司会 竜 崇正、山雄健次

パネルディスカッション

・「鏡視下手術の利点と問題点」*

司会 北島正樹、勝 健一

ラウンドテーブルディスカッション

・「ESTとEPBD—その選択と適応をめぐる」

司会 池田靖洋、藤田直孝

・「胆道ステントの問題点と対策」

司会 柿田 章、乾 和郎

コンセンサスミーティング

・「Covered stentの位置付け」*

司会 峯 徹哉

・「原発性硬化性胆管炎の診断をみなおす—現診断
基準の問題点をめぐって—」

(*：他学会企画による共同主題)

開催概要

日本胆道学会は、1993年DDW-Japan発足以来これに全面参加してきたが、2000年、神戸において開催された、この第36回総会がDDW-Japan参加の最後となった。専門医制度の展開と共に、DDW-Japanは臨床医の生涯教育に軸をとることとなり、その結果、斬新的アイデアの母体となる一般（自由）演題の討議に十分な時間が割けなくなる状況になってきていた。この事は、総会と併せて年一回の学術集会を開いてきた本学会にとって決定的な不都合と考えられ、次年度以降、以前に戻して単独開催となり、DDW-Japanから離れることとなったのである。

しかし、この年は、本学会を含め、日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本肝臓学会、日本膵臓学会、日本消化吸収学会、日本消化器集団検診学会の計7学会と、それまでのDDW-Japanの中で全面参加の学会数が最も多い合同会議となり、12,500名を超える参加者を得て賑わった。阪神淡路大震災から5年、その痛手から復興途上にあった神戸に些かの活気を添えたDDW-Japanでもあった。

本総会は20世紀最後の年にあたり、そして、DDW-Japan参加の最後ともなるので、プログラムを組むに当って、21世紀への橋渡しを念頭におくとともに、他の消化器関連学会に本学会の存在感を示せる内容ともすることを心がけた。胆道病学ばかりでなく、広く消化器系、また、全身の生理・病態に深く関わる“胆汁酸”の代謝・動態について、牧野 勲教授による特別講演を仰ぎ、DDW-Japanの教育講演には、致命的な病態に発展することの少なくなかった“急性胆管炎”の治療法とその考え方について、この四半世紀にみられた大進歩を踏まえて田中雅夫教授にお願いした。また、会長講演としては、難治性疾患“肝内結石症”に対する経口的内視鏡治療の有効性と問題点について、教室の少ない経験ながら、今後の議論のたたき台になればというつもりで臨床的視点から述べさせていただいた。

企画主題には、EST、EPBD、胆道ステント、MRCPといった先端医療技術の有用性と問題点の整理を中心に、胆道癌、ならびに、胆石症治療は当時議論白熱の課題に絞った上で、診断基準再検討の要の時宜にあった原発性硬化性胆管炎を加えて、シ

ンポジウム2、パネルディスカッション2、ワークショップ3、ビデオワークショップ1、ラウンドテーブルディスカッション1の9主題を決定した。その他、他学会の企画に共同参加した7主題を加えて、合計16主題であった。

ただ、前述したように、学会運営の上での課題は、DDW-Japanとしての統合性と研究集会としての自主的機能の両立をはかることにあった。統合的な原則では、一般演題はポスター展示であったが、本学会では専門的な討議を充実する必要性から、従来の口演発表を何とか踏襲した。しかし、認定医制度をもつ学会へ応募する本学会会員の止むを得ない事情もあり、本学会への一般演題は減少傾向にあった。そこで、他学会応募の本学会員のポスター演題は、発表者の同意があれば、本学会にて口演発表も併せて行えるよう、各学会と折衝し、複雑な連絡に些か苦勞した思い出が残ったが、消化器病学会との間で共通一般演題として実現できた。

本総会は、DDW-Japan合同会議、および、参加学会の関係者の方々のご理解とご協力を得つつも、合同会議の枠内にて本学会の伝統を守り、次に継承する成果を挙げて滞りなく終了できたことは、一重に日本胆道学会有山理事長（当時）の固い意思と役員・会員各位から格別なご支援を頂戴した賜であったことを思い、心から感謝している。



懇親会

第37回

日本胆道学会総会開催概要

会 期：2001年10月4日（木）～5日（金）

会 場：東京：京王プラザホテル

会 長：二川俊二（順天堂大学医学部第2外科教授）

プログラム委員：跡見 裕、柿田 章、川原田嘉文、税所宏光、須山正文、
藤田力也、船曳孝彦、堀口祐爾

演題総数：161題



開催内容

特別講演「胆道癌の診断と治療の問題点」

有山 襄

招待講演「Liver Transplantation for Biliary Tract Disease」

Russell, W. Strong

会長講演「門脈圧亢進症と胆道疾患」

二川俊二

3「鏡視下胆道手術の合併症、その対策と現況

司会：船曳孝彦、渡辺五郎

ワークショップ

4「膵胆管合流異常症の診断・治療の進歩」

司会：跡見 裕、安藤久實

一般演題 89題

主題

シンポジウム

1「胆道癌（胆管癌）の集学的治療」

司会：川原田嘉文、斎藤博哉

シンポジウム

2「胆道における3次元画像・バーチャル画像」

司会：堀口祐爾、古川敬芳

パネルディスカッション

1「胆嚢癌のstagingと治療方針」

司会：柿田 章、二村雄次

パネルディスカッション

2「総胆管結石—乳頭機能温存療法の可否をめぐって—」

司会：藤田力也、田中雅夫

ワークショップ

1「胆道疾患と分子生物学」

司会：税所宏光、田妻 進

ワークショップ

2「胆道狭窄に対するステント治療」

司会：須山正文、藤田直考

ワークショップ

開催概要

第36回までの学術集会がDDW-日本消化器病関連学会週間の中で開催されていたものと異なり、第37回総会からは単独集会として、胆道の専門医のみが一堂に会して総合的な討論を行い、新しい診断・治療の方針を発信する集会へと姿を変えたものとなりました。

特別講演として、画像診断の第一人者である有山先生に胆道癌の診断と治療の問題点について、内科から外科への情報の形として講演していただいた。招待公演は、最先端の治療として、肝移植について、オーストラリアPrincess Alexandra病院のStrong先生に講演していただいた。

シンポジウム1では、根治切除が困難な進行胆道癌例に対する治療戦略を明らかにし、各種の集学的治療について、主にQOLの観点から発表・討論していただいた。シンポジウム2では、従来観察困難であったり、過大な侵襲が必要であった胆道領域においても、低侵襲検査から立体画像を作成することが可能となり、通常の横断・断層画像とは異なる視点から観察できるようになったが、その再構成画像の評価、利点と問題点、治療への活用法などにつき活発な議論がなされた。パネルディスカッション1では、胆嚢癌の予後を的確に反映したstagingとそれに基づいた治療方針について検討がなされた。パネルディスカッション2では、十二指腸乳頭機能温存の程度とその意義など、温存療法の利点と問題点が議論された。ワークショップ1では胆道疾患全領

域、悪性・良性を含めて、疾患の発生機序と予防など幅広い視野で、分子生物学の応用のあり方や問題点の検討が行われた。ワークショップ2では胆道ステントの工夫について検討がなされた。ワークショップ3では、鏡視下手術の本邦導入10年経過時点での本術式の合併症とその対策が検討された。ワークショップ4では、膵胆管合流異常の診断と治療の総括と問題点について議論がなされた。

一般演題はポスターを予定していたが全て口演発表としました。

また、胆道学会としては初めてビデオセッションを企画し、21世紀の幕開け学会にふさわしい最新の診断、治療手技の詳細をビデオにて、討論していただき活発な議論が盛んに行われた。

会長講演としては、私の専門領域の一つである門脈圧亢進症における胆道系疾患の特殊性について、講演させていただいた。

2日間の会期を通して、各会場では有意義な発表と討論が行われ、盛會裡に会を開催することが出来ましたことを心から感謝いたします。



学会終了直後のスタッフ集合

第38回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『独自性と調和を求めて』

会期：2002年9月27日（金）～28日（土）

会場：名古屋国際会議場

会長：堀口祐爾（藤田保健衛生大学消化器内科教授）

プログラム委員：税所宏光、嶋田 紘、須山正文、田尻 孝、田中直見、田中雅夫、
二村雄次、藤田直孝、真口宏介、宮川秀一、渡邊英伸

参加人数：約400名

演題総数：189題



開催内容

鼎談—日本胆道学会の歩みと今後への提言

有山 襄、中山和道、大藤正雄

司会 高田忠敬

招待講演—Therapeutic Endoscopy for Biliary Diseases in Korea.

Young-Soo Moon (Korea National Cancer Center)

司会 堀口祐爾

会長講演

超音波医学からみた胆道病学

司会 有山 襄

シンポジウム

1) 胆道疾患に対するIVRとIVEの再評価（公募）

司会 田中雅夫

須山正文

特別発言 大井 至

パネルディスカッション

1) 原発性硬化性胆管炎の診断特に胆管癌との鑑別診断をめぐって（公募）

司会 税所宏光

嶋田 紘

特別発言 早川哲夫

2) 胆管癌の術前診断と外科治療—内科医と外科医の対話（指定）

司会 川原田嘉文

パネリスト 二村雄次、真口宏介

3) 早期胆嚢癌の残された課題—病理医と画像診断医との対話（指定）

司会 永川宅和

パネリスト 渡邊英伸、藤田直孝

ワークショップ

1) 術前減黄の必要性とその評価（公募）

司会 田中直見

田尻 孝

2) 胆石症におけるクリニカルパス（公募）

司会 古川敬芳

宮川秀一

3) 実技ワークショップ—安全性と成功率を高めるためのERCP技術（IDUS、POCS、Stentingも含めて）（指定）

総合司会 山雄健次

インストラクター 長谷部修

小松 裕

明石隆吉

五十嵐良典

開催概要

本会は平成13年度よりDDW Japanから分離し再度単独開催となって2回目の学術集会であった。キャッチフレーズは『独自性と調和を求めて』とさせて頂いた。外科医、内科医、放射線医、病理医が十分な対話を重ねつつ一定のコンセンサスを得ることをテーマとし、我が国の消化器関連医学会における胆道学会のアイデンティティーやアジアにおける日本のリーダーシップなどを鑑みこのようにさせて頂いた。おりしも当年2002年の6月には日韓共催でサッカーワールドカップが開催され、大いに盛り上がった。その縁もあり、招待講演では韓国からMoon先生をお呼びし、韓国における胆道治療内視鏡の現状について講演して頂いた。一方では、20世紀を支えた先達と21世紀を支える若手研究者たちとの接点という観点から、鼎談—日本胆道学会の歩みと今後への提言—という特別企画もさせて頂いた。

特別プログラムのシンポジウム「胆道疾患におけるIVRとIVEの再評価」では、IVRとIVEの有用性が整理され、日進月歩のこの分野での最新の知見が発信された。パネルディスカッション1の「原発性硬化性胆管炎の診断特に胆管癌との鑑別診断について」では、いわゆる限局型の原発性硬化性胆管炎と胆管癌との鑑別診断を中心に実りあるディスカッションが展開され、今後の問題点が示された。パネルディスカッション2の「胆管癌の術前診断と外科的治療—内科医と外科医の対話」では、肝外胆管癌における術前診断に関して、内科医の目指すものと外科医の望むことについて2人のパネリストに十分討論して頂き、一定のコンセンサスが得られた。同様に、パネルディスカッション3の「胆嚢早期癌—病理医と内科医の対話」でも、早期胆嚢癌の診断における残された問題点についてエキスパートの病理医と内科医に徹底的に討論して頂き、今後の課題が浮き彫りにされた。ワークショップでは「術前減黄の必要性とその再評価」と「胆石症におけるクリニカルパス」という主題が取り上げられたが、特に後者においては多数の演題がエントリーされタイムリーな企画であったと思われる。実技ワークショップの「安全性と成功率を高めるためのERCP技術」では、ダミーを使ってERCPとその応用手技、内視

鏡治療の実際についてライブ形式でデモしていただき、同時に会場の会員にもハンズオンの形で参加して頂いた。教育プログラムとして有意義であったと確信している

お陰で、シンポジウムなどの主題演題に40題、一般演題には149題と多数の演題を応募していただき、参加者減が危惧された本会を大いに盛り上げて頂いた。会員諸兄弟に深謝するとともに本学会の益々の発展を祈りたい。



Sep. 27-28, 2002, NAGOYA

第39回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：更なる飛躍を目指して

会期：2003年9月18日（木）～19日（金）

会場：金沢エクセルホテル東急（金沢市）

会長：永川宅和
（金沢大学医学部保健学科）

プログラム委員：太田哲生、唐沢英偉、嶋田 紘、須田耕一、田中直見、永井秀雄、
藤田直孝、宮崎 勝、山雄健次、渡辺英伸（敬称略、五十音順）

参加人数：600名強

演題総数：266題



開催内容

1. 会長講演
「胆道疾患の研究にかけてきた我が思い」
永川宅和
座）
診断：山雄健次（愛知県がんセンター消化器内科）
治療：小松 裕（東京大学医学部消化器内科）、永井秀雄（自治医科大学消化器外科）
 2. 招待講演
「肝の胆管内乳頭状腫瘍 Intraductal papillary neoplasia of the liver の病理」
中沼安二
 3. 教育セミナー
胆道疾患の病理、診断、治療—診療科の枠組みを越えた「胆道医」育成をめざして
胆嚢
病理：渡辺英伸（新潟大学医学部第1病理学教室）
診断：藤田直孝（仙台市医療センター仙台オープン病院消化器内科）
治療：長谷川洋（名古屋第二赤十字病院外科）、嶋田 紘（横浜市立大学医学部第二外科）
胆管
病理：鬼島 宏（東海大学医学部総合診療学系病理診断学）
診断：真口宏介（手稲溪仁会病院消化器病センター内科）
治療：徳村弘実（東北労災病院外科）、宮崎 勝（千葉大学大学院医学研究院臓器制御外科学）
 4. パネルディスカッション
胆嚢結石症治療のガイドライン作成に向けて
 5. シンポジウム1
（総）胆管結石切石例の長期予後（10年以上経過例）
 6. シンポジウム2
十二指腸乳頭部腫瘍の診断と治療
 7. ワークショップ1
胆道と内視鏡—胆道疾患に対する内視鏡的診断と治療の有用性（ビデオ）
 8. ワークショップ2
胆道癌の免疫・化学療法と放射線療法
 9. ランチョンセミナー
 10. 一般演題（公募）
- 十二指腸乳頭部
病理：須田耕一（順天堂大学医学部病理学第一講

開催概要

第39回日本胆道学会学術集会を、金沢にて、平成15年9月18日（木）、19日（金）の2日間、私の恩師、宮崎逸夫教授による第19回に続いて、20年振りに開催しました。

本学会は、胆嚢造影研究会から、胆道疾患研究会、学会に発展しました。

私自身、胆道の病気については、研究会の発足当初から興味があり、教室の先輩の仕事のお手伝いをしながら、よく学会には参加しておりました。また、医師になり、8年目で、本学会がシンポジウムの公募にはじめて踏み切った「閉塞性黄疸の診断と治療」に応募したとき、それが採用されることになり、本当に衝撃的な思い出です。以来、胆道については、3枚シリーズ術中胆道造影法、可変式負荷胆管内圧測定法や1インチ小開腹による胆嚢摘出術を考案し、さらに、本邦の胆道癌規約についてはその作成当初からかわり、また、その規約委員長をつとめ、規約に基づく全国登録委員長もつとめてまいりました。胆道に対する思い入れは強く、本学会の会長についても大学在任最後の年ということで立候補しました。

本学会も、当時DDWからの強い要請で一旦合流しましたが、平成12年より再び離れて新たに独立して運営していくことになりました。当時の本学会員数は2400名程度でありましたが、実際の出席者は400～500名程度と低迷気味でありました。DDWとの合流前は1000名を越える出席者があった時代を思いますと雲泥の差でした。このような背景から、私は、特に若い学会員の発掘と育成を目指し、第39回学会のキャッチフレーズを「更なる飛躍を目指して」と題し、外科医、内科医、放射線科医、病理医が討論を通じて一定のコンセンサスが得られるよう20世紀を支えてきた人たちと21世紀を支える人たちとの対話を計画し、そして、学会において新しい高度な情報を整理して伝えることを目標としました。この手法は、今から約40年近く前、私が、北陸地区で皆様の協力を得て作った、今では120回を越えるまでになった北陸肝胆膵勉強会に習いました。

具体的な内容については、教育セミナーとして、胆道疾患の病理、診断、治療—診療科の枠組みを越

えた“胆道医”の育成を目指して、胆嚢、胆管、十二指腸部の領域に分け、1日半にわたってそれぞれ4人、計12人のエキスパートによってセミナーを持ちました。パネルディスカッションでは、胆嚢結石症治療のガイドライン作成に向けてと題し、シンポジウムでは、①（総）胆管結石例の長期予後（10年以上経過例）、②十二指腸乳頭部腫瘍の診断と治療、ワークショップでは、①胆道と内視鏡—胆道疾患に対する内視鏡診断と治療の有用性（ビデオ）、②胆道癌の免疫・化学療法と放射線療法などを予定しました。さらに、特別企画として、「私の夢」と題し、12名の名誉会員、特別会員の皆様からお話しをお聞きする機会を作りました。そのほか、招待講演を1題設けました。

演題は266題に及び、特にパネル、シンポは約1.7倍の競争率で、選定はプログラム委員の先生にお願いしました。9月の金沢は、依然として暑い日でしたが、各セッションでも熱い討論がなされました。特別企画の「私の夢」と、教育セミナーは好評で、多くのお褒めの言葉を頂きました。参加者も600名を越えました。文字通り、「手作りの学会」となり、それだけに、心をこめて学会の再生に尽力したつもりでいます。

第40回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『共通の認識と社会への還元』

会期：2004年9月24日（金）～25日（土）

会場：つくば国際会議場

会長：田中直見

（筑波大学臨床医学系 消化器内科 教授）

プログラム委員：跡見 裕、今泉俊秀、神澤輝実、唐澤英偉、須田耕一、
田妻 進、角田 司、平田公一、藤田直孝、宮川秀一

参加人数：449名

演題総数：213題



開催内容

会長講演 「肝内結石症の疫学、成因と今後の治療」

田中直見

招待講演 「胆嚢癌マウスモデル：胆嚢癌発生のメカニズムと臨床への応用」

木口 薫

特別企画1 「日本胆道学会40年の歩みと今後の展望」

司会 中山和道、有山 襄（前理事長）
二村雄次（現理事長）

特別企画2 「胆道炎のガイドラインをめぐって：エビデンスはあるのか」

司会 高田忠敬、平田公一

教育セミナー

1. 胆道系の画像診断の基礎と応用

1) US、UUS

渡邊五朗

2) CT

古川敬芳

3) MRCP、MRI

崔 仁煥

2. 胆道系疾患の内視鏡治療（video、実技を中心に）

1) EST

猪俣正秋

2) EPBD

安田一朗

3) Stenting（plastic）

木村克巳

4) Stenting（metallic）

伊佐山浩通

5) PTCS下治療

前谷 容

6) 内視鏡的乳頭切除術

伊藤彰浩

3. 胆石症治療における腹腔鏡下手術のコツとピットホール

1) 適応と手術のコツ

来見良誠

2) 手術のコツと開腹移行

山下裕一

3) ピットホールと対応

向谷充宏

主題

シンポジウム（12題）

「胆道癌診療の現状と今後の展望」

司会 角田 司、田妻 進

特別発言 嶋田 敏

パネルディスカッション（11題）

「総胆管結石治療の標準化に向けて」

司会 藤田直孝、眞栄城兼清

特別発言 池田靖洋

ワークショップ（14題）

1 「肝内結石症の疫学、成因および治療に関するupdate」

司会 跡見 裕、税所宏光

特別発言 谷村 弘

ワークショップ（10題）

2 「睥・胆管合流異常のcontroversy」

司会 神澤輝実、宮川秀一

特別発言 須田耕一

開催概要

今回のテーマを「共通の認識と社会への還元」とした。わが国の胆道癌の手術成績は世界一とされているが、各施設で治療法に違いがある。現在胆道領域で問題となっているテーマについて最新の診断治療を共通の認識とし、ガイドラインを作成し、社会に還元することを目的にした。厚生労働省の班会議で議論が進んでいる「胆道炎のガイドラインをめぐる」を特別企画2とした。

また40回という節目の年であり、「日本胆道学会40年の歩みと今後の展望」を特別企画1とした。1965年の第1回胆嚢造影研究会から全部ご出席いただいている中山和道先生にご国会頂き、前理事長有山 襄先生と現理事長二村雄次先生を囲んだ三者会談であった。当時のプログラムを提示されながら、中山和道先生が当時の熱い討論の様子をひしひしと感じさせられる熱弁をふるわれた。1969年からは胆道疾患研究会と名称も改められ、さらに1982年からは日本胆道疾患研究会となり、1987年から日本胆道学会となって、現在に至っている。当時を知らない若い会員にも深い感銘を与えるものであった。

また招待講演ではTexas大学MDアンダーソン癌センター木口 薫先生による「胆嚢癌マウスモデル：胆嚢癌発生のメカニズムと臨床への応用」のご講演を賜わった。

シンポジウムは「胆道癌診療の現状と今後の展望」、パネルディスカッションでは「総胆管結石治療の標準化に向けて」、ワークショップには「肝内結石症の疫学、成因および治療に関するupdate」と「膵胆管合流異常のcontroversy」をとりあげた。第39回日本胆道学会学術集会で導入された教育セミナーは、大変好評で、今回は「診断と内視鏡治療と腹腔鏡下手術」に焦点をしぼり、第一線で活躍する講師陣により教育セミナーを行った。

本学術集会により、内科医、外科医、放射線科医、病理医が各々の領域を越え、「胆道」という領域に対する理解を深め、質の高いプライマリケアが実践されることが期待され、意義ある学術集会になったと確信しております。



日本胆道学会40年の歩みと今後の展望 前理事長 有山襄、会長 田中直見、理事長 二村雄次、司会 中山和道



嶋田 紘先生、会長、跡見 裕先生



招待講演 木口 薫先生ご夫妻

第41回

日本胆道学会学術集会開催概要

会 期：2005年9月29日（木）～30日（金）

会 場：ホテルグランヴィア岡山

会 長：角田 司
（川崎医科大学附属川崎病院院長）

参加人数：417名

演題総数：247題



開催内容

特別講演「医学史から学んだこと—胆道史を中心として—」

土屋涼一

会長講演「膵・胆管合流異常と胆道癌」

角田 司

シンポジウム

1「胆道癌の診断の進歩」

唐澤英偉

司会 今泉俊秀

2「Stage IV胆嚢癌治療のstrategy」

千々岩一男

司会 宮崎 勝

パネルディスカッション

1「わが国のPSC診療を見直す：自己免疫性膵炎（AIP）との異同」

川崎誠治

司会 田妻 進

2「胆管細胞癌と肝門部胆管癌の接点：規約統一の可能性」

島津元秀

司会 宮川秀一

ワークショップ

1「胆管stentingのpitfall」

齋藤博哉

司会 上田順彦

2「胆管内乳頭粘液性腫瘍（粘液産生胆管腫瘍）の診断と治療」

榑野正人

司会 杉山政則

3「直接胆道造影の適応—MRCPおよび3D-CTの限界」

大谷泰雄

司会 三上 繁

4「腹腔鏡下胆嚢摘出術の合併症とセーフティマネージメント」

木村泰三

司会 井戸健一

教育セミナー

1「ERCPの指導と教育」

糸井隆夫

司会 藤田直孝

2「PTBD関連手技のビデオセミナー」

小林 剛、藤田直孝

司会 前谷 容

3「胆道内視鏡治療のコツとpitfall」

田中聖人、安田健治朗、中島正継

司会 真口宏介

要望演題

ビデオセッション

一般演題（口演）

一般演題（ポスター）

開催概要

第41回日本胆道学会学術集会を2005年9月29日（木）、30日（金）の2日間、岡山市のホテルグランヴィア岡山で開催した。当時、胆道領域で問題になっているテーマをとりあげ、最新の診断・治療について討論していただき、共通の認識となるようにプログラムを構成した。

特別講演として、本学会の名誉会員で、長崎大学名誉教授でもある土屋涼一先生による「医学史から学んだこと―胆道史を中心として」と、米国UCLAのHoward A Reber教授による招待講演として「The UCLA Experience with Cholangiocarcinoma」を行った。

シンポジウム1では「胆道癌の診断の進歩」と題して、当時の最新の画像診断、内視鏡診断、胆汁の遺伝子診断などによる成績を報告・討論していただいた。

シンポジウム2では「StageIV胆嚢癌治療のstrategy」をとりあげ、この成績不良な疾患における治療戦略を多面的に討論することにより、光明をもたらす治療法を模索した。

パネルディスカッション1では、「わが国のPSC診療を見直す：自己免疫性膵炎（AIP）との異同」と題して、PSCとAIPに関する当時の最新の知見が討論された。パネルディスカッション2では、「胆管細胞癌と肝門部胆管癌の接点：規約統一の可能性」をとりあげ、両者の異同を各方面から討論し、可能ならば統一した規約作成の一助になればと考えた。

ワークショップでは「胆管Stentingのピットフォール」、「胆管内乳頭粘液性腫瘍（粘液産生胆管腫瘍）の診断と治療」、「直接胆道造影の適応―MRCPおよび3D-CTの限界」、「腹腔鏡下胆嚢摘出術の合併症とセーフティマネージメント」の4つ

の主題について、当時の知見が討論された。

教育セミナーは、ビデオによる実技を中心にした「ERCPの指導と教育」、「PTBD関連手技のビデオセミナー」、「胆道内視鏡治療のコツとピットフォール」の3手技に焦点を絞り、第一線で活躍する講師陣により行われ、多数の若手医師が参加した。

また、一般演題は口演発表69題、ポスター発表53題、ビデオセッション7題にわかれ発表が行われた。

約一年前から細々と準備を始め、まず評議員へのアンケート調査を行い、主題プログラムを作った。一般演題の公募は4月から6月までインターネットのホームページ上で行い、最終的に247題の演題が登録され、例年以上の演題数を集めることができた。指定施設への依頼、座長の依頼など、数多くの郵便、FAX、E-mailでのやり取りを経て、最終的にプログラムができて上がったのは7月末だった。プログラムが決まってからは、評議員懇親会などの出欠の確認、宿泊の確認、当日の会場係の依頼分担、学会担当会社Medとの打ち合わせなどを行った。経費節約のため、発表者にはPCを持参していただくようにしたり、会場係も科内の人員でまかなうようにした。有料参加者は1日目305名、2日目112名、合計417名であった。予算的にも問題なく学会を終えることができた。川崎医科大学消化器外科は小さな教室であるが、教室員の全員が一丸となって、それぞれの役割を果たし、トラブル無く岡場で学会を開催、運営することができた。またこの場を借りて、当時、協力して下さった多方面の皆様へ感謝いたします。



第41回日本胆道学会学術集会のスタッフ一同

第42回

日本胆道学会学術集会開催概要

会 期：2006年9月15日（金）～16日（土）

会 場：仙台国際センター

会 長：藤田直孝（仙台市医療センター消化器内科）

プログラム委員：乾 和郎、海野倫明、太田哲生、近藤 哲、齋藤博哉、須山正文、
田妻 進、千々岩一男、永井秀雄、柳野正人、宮崎 勝、山雄健次

演題総数：229題



開催内容

理事長講演「胆道学会の流れと国際化」

二村雄次

会長講演「内視鏡で診る胆道疾患」

藤田直孝

特別講演「胆道疾患診療をめぐる法的諸問題」

古川俊治

招待講演 “Where are we and where are we going?—Challenges of ERCP in the 21st Century”

Enders KW Ng

主題

シンポジウム

1「肝門部・上部胆管閉塞に対するアプローチ—診断から治療まで」

司会 須山正文、海野倫明
病理コメンテーター 坂元亨宇

2「胆管結石治療例の長期予後」

司会 杉山政則、五十嵐良典

パネルディスカッション

1「急性胆管炎・胆嚢炎の診療ガイドラインをめぐって」

司会 田尻 孝、田妻 進

2「ss胆嚢癌の診断と治療」

司会 近藤 哲、乾 和郎
病理コメンテーター 鬼島 宏

ワークショップ

1「胆嚢管癌診断の進歩」

司会 千々岩一男、野田 裕
病理コメンテーター 鬼島 宏

2「乳頭部腫瘍に対する治療法の工夫」

司会 永井秀雄、廣岡芳樹
病理コメンテーター 柳沢昭夫

3「胆汁胆道逆流の臨床と基礎」

司会 太田哲生、花田敬士
病理コメンテーター 柳沢昭夫

教育セミナー

「胆道外科手術 virtual live demonstration 1」

「胆道外科手術 virtual live demonstration 2」

モデレーター 宮崎 勝、徳村弘実、柳野正人

「胆道内視鏡 live demonstration 1」

「胆道内視鏡 live demonstration 2」

モデレーター 山雄健次、明石隆吉、糸井隆夫

開催概要

第42回日本胆道学会学術集会のお世話を仰せつかり、地方の一医療施設として大変光栄に存じると共に、身の引きしめる思いで会の準備、運営を担当したことをまず思い出す。

時宜を得たプログラムを準備すべく、評議員、プログラム委員の先生方を中心にご意見を頂戴し、前述のような構成とした。

二村理事長には、本会の歴史と国際化に向けて講演を頂戴し、日本の胆道医が進むべき方向をお示しいただいた。これに合わせ、招待講演では香港中文大学のEnders Ng教授から“Where are we and where are we going?—Challenges of ERCP in the 21st Century”と題して講演を頂戴した。

当時は医事紛争問題が社会的に大きく取り上げられていたこともあり、外科医でもあり弁護士でもある古川俊治氏に「胆道疾患診療をめぐる法的諸問題」と題した講演をお願いし、会員の注意を喚起した。

会長講演では、胆道疾患に対する内視鏡的診断、治療に係わった内科医として、「内視鏡で診る胆道疾患」と題し、自分の行った臨床研究を含めて講演をさせていただいた。内視鏡的診断と治療については、live demonstrationをとの声を数多く頂戴したため、ここ3回連続して企画されていた教育セミナーに代わって準備を進めた。本会では初の試みであったが、大会2日目の午前と午後にもわたって仙台市医療センターから会場へ中継を行った。さらに、外科の手術手技についてもビデオを用いながらvirtual live demonstrationを企画した。放映を終えた後、多くの先生から好意的な感想を頂戴し、苦勞のし甲斐があったと感激したことが昨日のことに思い出される。ワークショップに取り上げた「胆嚢管癌診断の進歩」もおそらく本会初のことで、胆道領域の診断学の進歩を如実に表すものであったと考えている。



会長講演「内視鏡で診る胆道疾患」



教育セミナー「胆道内視鏡 live demonstration」



ワークショップ1「胆嚢管癌診断の進歩」

第43回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『先端医療と標準治療の調和』

会期：2007年9月27日（木）～28日（金）

会場：東京ドームホテル

会長：田尻 孝（日本医科大学 外科）

参加人数：887名

演題総数：282題



開催内容

理事長特別講演：「私が胆道医になった頃」

二村雄次

特別発言：中山和道

会長講演：「胆管上皮癌の分子生物学的検討」

田尻 孝

2「肝門部胆管癌の治療方針」口演7題

司会：海野倫明、齊藤博哉

特別発言：尾形佳郎

招待講演：「Biliary Epithelial Cell Injury and Repair in Liver Disease」

Anthony J. Demetris

3「胆道癌の化学療法」口演13題

司会：山雄健次、古瀬純司

特別発言：河原田嘉文

教育講演：「胆道癌の術前診断はどこまで可能か？」

E-1「肝内胆管癌の診断と治療」

山本雅一

ワークショップ

1「粘液産生性胆管腫瘍」口演11題

司会：中沼安二、露口利夫

特別発言：渡邊英伸

E-2「胆嚢癌の診断と治療戦略」

塚田一博

2「腹腔鏡下胆道手術の工夫」口演9題

司会：徳村弘実、宮川秀一

特別発言：松代 隆

E-3「肝外胆管癌」

真口宏介

3「胆道疾患へのIVR的アプローチ」口演10題

司会：須山正文、真口宏介

特別発言：税所宏光

主題

シンポジウム

1「総胆管結石の治療～内科医と外科医の接点～」口演8題

司会：藤田直孝、渡邊五朗

特別発言：永川宅和

司会：乾 和郎、今泉俊秀

特別発言：大井 至

2「胆道医を育てる」口演5題

司会：嶋田 紘、跡見 裕

特別発言：船曳孝彦

一般演題

ビデオ：3題

口演：128題

ポスター：51題

共催セミナー：8題

3「胆道癌の発生機序」口演9題

司会：中沼安二、田妻 進

特別発言：須田耕一

パネルディスカッション

1「胆道癌における肝切除、胆管温存、膵切除の是非」口演9題

司会：近藤 哲、千々岩一男

開催概要

ガイドライン、クリニカルパスなどの標準治療が一般化する中で、我々胆道疾患の専門家は先端医療を追求し、新たな胆道医を育成する義務があると考え、テーマを「先端医療と標準治療の調和」としました。

すなわち、進歩の著しい近代医学の中でも、肝胆膵領域における進歩は特に目覚ましいものがあります。わずか半世紀前まではこれらの臓器にメスを入れることさえ容易いことではありませんでした。しかし今日では、この領域における疾患の理解は飛躍的に高まり、胆管は単なる胆汁排出の器官として働くだけでなく、胆管の持つ多様な機能の詳細が明らかにされてきており、先端医療を日本から世界に発信するとともに、より一層、社会に貢献する学術団体へと発展することを願って実効のある企画としました。

そこでテーマをもとに3つずつのシンポジウム、パネルディスカッション、4つのワークショップを組み、少し欲張りなプログラムであったかとも思いましたが、多くのご応募をいただき、しかも一般演題を含みいずれの演題も内容のあるものばかりで、大変実りあり、しかも記憶に残る学術集会となりました。

特にシンポジウム2の「胆道医を育てる」の前には、二村理事長にご無理をお願いして、理事長講演としてシンポジウムの基調講演ともなる「私が胆道医になった頃」のタイトルで講演をお願いしました。

また、会長講演は「胆管上皮癌の分子生物学的検

討」と題し、胆道系悪性腫瘍の予後の改善を図るためには基礎医学的研究における胆道癌の病態生理を特徴づける必要があるとの考えで続けてきた、教室の胆道癌研究の歴史を踏まえながら、その研究の一端を述べるとともに、今後の研究目標を述べさせていただきます。

お陰さまで、多くの皆様のご参加をいただき、また多数の優れたご発表と活発な討議をいただき、盛会裡に全日程を終えることができました。これも偏に参会いただいた皆さまのご支援、ご厚情の賜物と改めて厚く御礼申し上げます。

有難うございました。



運営委員集合写真

第44回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『継承・改革・発展』

会期：2008年9月19日（金）～20日（土）

会場：名古屋東急ホテル

会長：乾 和郎

（藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院 消化器内科 教授）

プログラム委員：五十嵐良典、海野倫明、太田哲生、木村 理、近藤 哲、
杉山政則、須山正文、田妻 進、露口利夫、柳野正人、藤田直孝、
真口宏介、宮崎 勝

参加人数：日本胆道学会会員及び会員外の医師 583名

演題総数：273題



開催内容

理事長講演「胆道学会のこれからの進むべき道」

二村雄次

会長講演「胆道癌の診断—より早期に、より正確に
を目指して—」

乾 和郎

教育講演1「胆道癌診断の最前線」

糸井隆夫

教育講演2「No-touch isolation technique を用いた
幽門輪温存膵乳頭十二指腸切除術」

太田哲生

教育講演3「放射線治療」

齋藤博哉

教育講演4「胆道癌に対する化学療法の現状と今後
の展望」

古瀬純司

教育講演5「ステンティング」

伊佐山浩通

特別企画「症例を大切に：画像と病理の接点」

司会：中沼安二、角谷真澄

病理コメント：鬼島 宏

総括発言：中山和道

主題

シンポジウム

1「高齢者胆石の治療戦略」

司会：杉山政則、藤田直孝

特別発言：千々岩一男

2「肝門部胆管癌における減黄の意義と方法」

司会：柳野正人、真口宏介

特別発言：今泉俊秀

3「胆道癌血管浸潤の診断と治療法の選択」

司会：近藤 哲、露口利夫

特別発言：竜 崇正

パネルディスカッション—21題

1「腹腔鏡下胆嚢摘出術の合併症—現状と対策—」

司会：安田秀喜、長谷川洋

特別発言：嶋田 紘

2「良性胆道狭窄に対する治療戦略」

司会：安藤久實、廣岡芳樹

特別発言：田尻 孝

ワークショップ—32題

1「胆管癌手術における胆管断端癌陽性の取扱い」

司会：木村 理、海野倫明

病理コメント：柳澤昭夫

2「自己免疫関連性胆管炎の病態と治療」

司会：田妻 進、大原弘隆

病理コメント：信川文誠

3「胆道へのアプローチ困難例に対する工夫」

司会：須山正文、五十嵐良典

特別発言：税所宏光

開催概要

テーマを「継承・改革・発展」とした。これは、「これまでに培われてきた学問、技術の良いものを引き継ぎ、その上で改革して新しいものを創り出していく。そうすればいい方向に発展していくであろうし、発展させて次の世代に伝えていきたい」という気持ちからであった。

主題として、シンポジウムに「高齢者胆石の治療戦略」、「肝門部胆管癌における減黄の意義と方法」、「胆道癌血管浸潤の診断と治療法の選択」の3題、パネルディスカッションに「腹腔鏡下胆嚢摘出術の合併症」、「良性胆道狭窄に対する治療戦略」の2題、ワークショップに「胆管癌手術における胆管断端癌陽性の取扱い」、「自己免疫性関連性胆管炎の病態と治療」、「胆道へのアプローチ困難例に対する工夫」の3題とした。主題では胆道疾患の診断治療を行う上での問題点を浮き彫りにし、解決策を探ることを目的としたが、シンポジウム26題、パネルディスカッション21題、ワークショップ32題が採用された。一般演題は、口演103題、ポスター83題の計186題で、全体としては273演題であった。各会場はいつも立ち席が出るほどであふれていて、活発な議論が盛んに行われた。

今回の目玉の一つとして、「症例を大切に」という特別企画を行った。胆道疾患には稀なものが多くあり、個人が経験する機会は限られている。貴重な症例を共有することは極めて重要であり、また、画像診断と病理診断は切っても切れない仲である。病理の中沼先生と画像診断の角谷先生に司会をお願いし、病理コメントを鬼島先生をお願いした。画像から導き出される診断と切除標本からフィードバックされる画像の持つ意味を考えることができ、有意義な企画であった。

理事長講演として「胆道学会のこれからの進むべき道」について二村雄次理事長にご講演いただいた。私の会長講演は「胆道癌の診断—より早期に、より正確にを目指して—」と題し、自分が進んできた臨床研究を中心に行った。教育講演として、胆道癌の診断と治療に関する5人のスペシャリストをお願いした。若手だけでなく、ベテランも勉強する良い機会であったと思われた。

平成16年から故宮崎逸夫教授の業績を記念して

設けられていた「宮崎奨励賞」が最後の年に当たり、口演発表とポスター発表より1題ずつ選ばれ、評議員会で表彰された。また、今回は会長奨励賞を設け、プログラム委員、査読委員の中で評価の高かった8題に贈った。

学会前日、台風の影響で九州からの航空便に支障を来したが、大きな混乱はなく無事に開催することができた。雨のおかげもあってか、会場内には多数の会員があふれ、活気が感じられた学会であった。2日間で583名と非常に多くの参加があり、盛会裡に滞りなく終了することができたことを心から感謝したい。



会長講演「胆道癌の診断—より早期に、より正確にを目指して—」・第1会場



ワークショップ1「胆管癌手術における胆管断端癌陽性の取扱い」・第2会場



学会終了直後のスタッフ集合

第45回

日本胆道学会学術集会開催概要

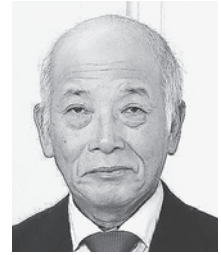
テーマ：『世界へエビデンスを』

会期：2009年9月18日（金）～19日（土）

会場：アパホテル&リゾート 東京ベイ幕張

会長：竜 崇正
（千葉県がんセンター長）

プログラム委員：伊佐山浩通、井戸健一、海野倫明、大谷泰雄、金本秀行、唐澤英偉、近藤福雄、佐々木亮孝、鈴木憲次、田妻 進、玉田喜一、露口利夫、戸田信夫、柳野正人、藤田直孝、古瀬純司、前谷 容、真弓俊彦、峯 徹哉、安田秀喜、山口武人、吉田雅博



演題総数：353題

開催内容

理事長講演

「日本胆道学会理事長就任にあたって」

近藤 哲
司会 二村雄次

会長講演

「肝門部の解剖に魅せられて」

竜 崇正
司会 大藤正雄

教育講演

「トランスレーショナル・オンコジェノミクスー千葉県がんセンターにおける取り組みー」

中川原章
司会 黒木登志夫

海外招待講演1、2

「Surgical Management of Complex Biliary Problems」

Michael J. Jacobs
司会 若林 剛

「Identification of the anterior sectorial trunk with particular reference to the hepatic hilar plates and its clinical importance」

Baik Hwan Cho
司会 遠藤 格

教育セミナー1～3

「胆道診療と医療裁判」

角谷 宏

司会 落合武徳

「胆道疾患における Interventional Endoscopy」

糸井隆夫

司会 平田信人

「ICG 蛍光法による術中胆道造影と肝癌診断法の開発」

石沢武彰

司会 高山忠利

エキスパートに学ぶ (1)～(4)

「肝門板を重視した肝門部胆管がん手術」

趙 明浩

司会 山本雅一

「胆石の内視鏡治療」

五十嵐良典

司会 安田健治朗

「患者にやさしい超音波内視鏡のやり方」

山口武人

司会 真口宏介

「胆嚢癌深達度診断と腹腔鏡下胆摘の胆嚢床出血予防対策」

藤本武利

司会 森 秀明

シンポジウム/ビデオミニシンポ/パネルディスカッション/ワークショップ/特別企画/看護師セクション

開催概要

元胆道学会理事長の二村雄次先生、前胆道学会理事長の故近藤哲先生の御好意で、2009年9月18日から19日に第45回日本胆道学会を千葉市幕張で開催させて頂いた。胆道疾患は実に多彩で診断や治療にも熟練を要する分野であり、医師になってからずっとその道を歩んできた私にとっては待望の学会開催であった。また会長講演のご司会を、千葉大第一内科と第二外科の肝胆膵症例検討を30数年間共に続けてきた故大藤正雄名誉教授にして頂いたのも大きな喜びであった。

日本の優れた診断治療技術を駆使して、「世界へエビデンスを」発信できる学会にしたいと考えた。主題としては、シンポジウムに「胆道がんの診断治療に有用な画像と外科解剖疾患における病理診断」、「安全確実な腹腔鏡下胆嚢摘出術の工夫」、「胆道癌に対する化学療法と標準化」の3題、パネルディスカッションに「胆管炎ガイドラインを巡って」、「胆管胆石の治療」の2題、ワークショップに「胆嚢癌における腹腔鏡下胆嚢摘出術の適応・位置づけと諸問題」、「こだわりの経皮穿刺」、「胆道手術におけるバーチャルシミュレーション、ナビゲーション」、「硬化性胆管炎の病態と胆管がんの合併」、「胆道疾患に対する内視鏡診断・治療の進歩」の5題とした。今回は主題に176題と多数の応募を頂いた。会場は、ほぼ満員の参加者で会場参加型での熱した議論が展開された。ワークショップでは、前回学会からの継続演題であり、胆管癌との鑑別に迷うことが多い硬化性胆管炎の問題点がクローズアップされた。学会として継続性あるテーマを設けて数年間検討しようとしたものである。新しい試みとして看護セクションを設けた。アメリカで大きな役割を持つNurse Practitioner (NP) を招き、「今求められる看護師の役割」というシンポジウムを開催した。アメリカと日本のがん専門看護師、認定看護師などを交え総合的な討論ができた。医師不足の日本において、看護力を如何にアップして医療現場に生かすかという点で、極めて有意義なシンポジウムが開催できたと思っている。

学会準備と当日運営はほぼ全て自前で運営することとし、多くの関連病院から医師、看護師、検査技師、事務など、数多くボランティアとして手伝って

いただき、学会の盛り上げと所属病院のレベルアップに極めて有用であったと自負している。

50周年を機に胆道学会がさらに専門性と質の高さを増し、さらに世界へエビデンスを発揮できる学会と顔に見える学会としての発展を切に願うものである。



パネルディスカッション「胆嚢炎ガイドラインを巡って」



外国人ゲストと

第46回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『伝承と想起～より一層の充実に向けて～』

会期：2010年9月24日（金）～25日（土）

会場：リーガロイヤルホテル広島

会長：田妻 進（広島大学病院 総合内科・総合診療科 教授）

プログラム委員：五十嵐良典、糸井隆夫、乾 和郎、海野倫明、太田哲生、窪田敬一、杉山政則、千々岩一男、露口利夫、藤田直孝、真口宏介、吉田雅博、良沢照銘、渡邊五朗

参加人数：日本胆道学会会員及び会員外の医師 661名

演題総数：319題



歴代会長

開催内容

理事長講演「日本胆道学会認定資格制度について」

近藤 哲（代行・乾 和郎）

司会：太田哲生、山雄健次

特別発言：宮崎 勝

会長講演「胆石症研究に魅せられて～胆道疾患に潜む魅力と混沌～」

田妻 進

2「重症急性胆道炎の診断とその対策」

司会：乾 和郎、吉田雅博

教育講演1「医学会：日米の違い」

木村 健

特別発言：税所宏光

教育講演2「胆道の臨床病理—BiINを中心として—」

中沼安二

ビデオワークショップ（25題）

1「私が薦める腹腔鏡手術のコツ」

司会：渡邊五朗、窪田敬一

特別発言：長谷川洋

教育講演3「胆道医が知っておくべき“胆汁酸の基礎と臨床”」

滝川 一

2「私が薦める胆道内視鏡のコツ～安全性を目指して～」

司会：良沢照銘、糸井隆夫

特別発言：中澤三郎

主題

シンポジウム

1「総胆管結石治療の現状と問題点—再発メカニズムとその対策—」

司会：杉山政則、五十嵐良典

特別発言：山下裕一

2「胆道癌診療ガイドラインの評価と今後の展望」

司会：千々岩一男、藤田直孝

特別発言：川原田嘉文

特別企画：ポトラックワークショップ（6題）

「胆道がん・膵がん治療への多職種アプローチ～積極的栄養介入から緩和ケアのあり方まで」

司会：佐伯俊成、水平健治

特別発言：平田公一

パネルディスカッション（21題）

1「胆道領域におけるIgG4関連疾患はどこまで解決されているか？」

司会：神澤輝実、露口利夫

特別発言：川崎誠治

2「効率よい胆道癌の術前診断～何が省略できるのか？～」

司会：真口宏介、海野倫明

特別発言：竜 崇正

エキスパートレクチャー

1「ERCPの基本手技を見直す～困難例の対策を求めて～」

司会：須山正文

2「EUS（IDUS）の標準的描写」

司会：安田健治朗

3「MDCTの基本と有用性」

司会：大屋敏秀

4「胆道癌の進展度診断」

司会：長谷部修

5「十二指腸乳頭部癌の深達度診断」

司会：向井秀一

ワークショップ（25題）

1「胆道がん化学療法の新展開～ネオアジュバント・アジュバント・放射線治療を含む様々な試み」

6「下部胆道癌に対する標準的PD（ビデオ）」

司会：村上義昭

7 「胆道癌手術後の断端陽性への対応」

司会：塚田一博

8 「肝移植における胆管再建」

司会：高田泰次

開催概要

「伝承と想起～より一層の充実に向けて～」をテーマとして、学会が継続的に推進してきた胆道研究ならびに様々な創意工夫に基づく診療技術の革新を踏まえて、さらなるステップアップへの期待をこめて全体を企画した。また、花盛りのガイドラインや最新のエビデンスを検証しながら、さらなる進化に繋がる議論の場を提供することを骨子とした。

主題として、シンポジウムに「総胆管結石治療の現状と問題点」、「胆道癌診療ガイドラインの評価と今後の展望」、パネルディスカッションに「胆道領域におけるIgG4関連疾患はどこまで解決されているか?」、「効率よい胆管癌の術前診断」、ワークショップに「胆道がん化学療法の新展開」、「重症急性胆道炎の診断とその対策」、さらにビデオワークショップとして「私が薦める腹腔鏡手術のコツ」、「私が薦める胆道内視鏡のコツ」の計8題を企画した。

加えて、内科・外科・病理の教育講演3題、さらに国内のエキスパートによる実践的なレクチャー8題を企画し、胆道専門医としての知識・技能・態度をより一層充実を意図した。一方、特別企画としてポトラックワークショップ「胆道がん・膵がん治療への多職種アプローチ～積極的チーム医療の動向から緩和ケアのあり方まで～」を立案したところ、斬新な企画として受け入れられ、積極治療から緩和へのギアチェンジを含めて、コメディカルを巻き込んだ実践的な意見交換の場となった。

今回は比較的早い段階から演題応募を得て最終的に319題の演題を採択した学術振興を目指して、一般演題187題の中から査読委員の先生方に採点をお願いして得点上位演題に会長奨励賞をお贈りした。さらに要望演題32題、主題100題を含めて、319題はいずれもの創意工夫に富むご発表であり、胆道領域の診療と研究の目覚ましい進歩を痛感する2日間となった。会長講演では「胆石症研究に魅せられて～胆道疾患に潜む魅力と混沌～」と題して、梶山先生に師事した1980年代を皮切りに、米国留学を挟んで図らずも大学人として過ごすことになった胆道研究を振り返り思いのままに自らを総括させていただ

いた。その意味で自らの軌跡を振り返る、よい機会となったことを関係各位にあらためて感謝申し上げます。



会長講演「胆石症研究に魅せられて～胆道疾患に潜む魅力と混沌～」



学会終了後のスタッフ集合写真

第46回 日本胆道学会学術集会
The 46th Annual Meeting of the Japan Biliary Association

2010年
9月24日(金)・25日(土)

会場 田妻進 広島大学病院 総合内科・総合診療科
会場 リーガロイヤルホテル広島

プログラム

会長講演
1. 胆道癌診療ガイドラインの現状と今後の展望
2. 胆道癌診療ガイドラインの検証と今後の展望

シンポジウム
1. 胆道癌診療ガイドラインの検証と今後の展望
2. 胆道癌診療ガイドラインの検証と今後の展望

ワークショップ
1. 胆道癌診療ガイドラインの検証と今後の展望
2. 胆道癌診療ガイドラインの検証と今後の展望

演題募集
募集期間 2010年8月14日(金) まで
～2010年9月15日(金) 迄
学術集会ホームページより
ご登録下さい。
<http://www.jba.or.jp/jba46>

広島大学病院 総合内科・総合診療科
TEL: 082-2431387 FAX: 082-2431387 E-mail: biliary@hpb.hiroshima-u.ac.jp

学会ポスター

第47回

日本胆道学会学術集会開催概要

テーマ：『創意工夫：From the Gloomy to Glorious Age』

会期：2011年9月16日（金）～17日（土）

会場：宮崎市：シーガイアコンベンションセンター

会長：千々岩一男（宮崎大学医学部腫瘍機能制御外科学）

プログラム委員：伊佐山浩通、糸井隆夫、乾 和郎、上坂克彦、海野倫明、太田哲生、
窪田敬一、杉山政則、滝川 一、塚田一博、藤井秀樹、藤田直孝、
良沢昭銘

参加人数：802名（日本胆道学会会員及び会員外の医師および医師以外のパラメディカルを含む）

演題総数：437題



歴代会長

開催内容

メモリアル講演「近藤哲前理事長の遺志を語る」

演者：二村雄次 司会：乾 和郎

会長講演「胆道外科医としての歩み—肝切除から臍頭十二指腸切除まで—」

演者：千々岩一男 司会：香月武人

特別講演「Cancer stem cell」

演者：森 正樹 司会：中尾昭公

日本胆道学会認定指導医養成講座—エキスパートの実技を学ぶ—

1「ERCPとstenting—困難例と膵炎予防への対策を含めて—」 糸井隆夫

2「EST、EPBDの使い分けと実技（ビデオ）」 安田一期

3「胆道疾患に対するEUSの標準的描出手技とそれを応用したInterventional EUSについて」 山雄健次

4「総胆管結石症に対する腹腔鏡下手術」 徳村弘実

5「胆管癌に対する進展度診断—ビデオによる実際—」 真口宏介

6「胆嚢癌に対する肝切除（ビデオ）」 甲斐真弘

7「肝門部胆管癌に対する肝切除」 上坂克彦

8「中下部胆管癌乳頭部癌に対する臍頭十二指腸切除（ビデオ）」 遠藤 格

主題

シンポジウム—21題

1「胆道癌集学的治療（外科・化学・放射線治療、分子標的治療）の現状と展望—切除例・切除不

能例での検証から—」

司会：乾 和郎、海野倫明

2「胆石症診療ガイドラインの検証と問題点」

司会：窪田敬一、田妻 進

パネルディスカッション—22題

1「ERCP後膵炎の予防と対策」

司会：伊佐山浩通、杉山政則

2「急性胆管炎・胆嚢炎の診療ガイドライン—検証と問題点—」 司会：安田秀喜、吉田雅博

ワークショップ—23題

1「粘液産生胆管腫瘍の病態—膵との対比—」

司会：中沼安二、山本雅一

2「胆道癌の最新の進展度診断—切除標本との対比から—」 司会：太田哲生、木村 理

ビデオワークショップ—21題

1「私が薦める腹腔鏡下胆道手術（NOTESも含め）—コツとピットフォール—」

司会：藤井秀樹、山下裕一

2「私が薦める胆道内視鏡治療のテクニック（乳頭部切除も含め）—コツとピットフォール—」

司会：五十嵐良典、良沢昭銘

開催概要

第47回日本胆道学会学術集会は、千々岩一男先生を会長として宮崎大学腫瘍機能制御外科学がお世話をさせていただき、2011年9月16日（金）と17日（土）の2日間、宮崎市のシーガイアコンベンションセンターで開催された。本学会が宮崎で行われるのは、教室の初代教授香月武人先生が1989年に開催されて以来22年ぶりであった。千々岩先生は本学会開催の翌々年の2013年11月26日に病にて逝去された。

千々岩会長は学術集会のメインテーマを「創意工夫：From the Gloomy to Glorious Age」とした。1970年代から現在に至るまで、諸先輩の創意工夫により胆道疾患の診断手技や治療法が飛躍的に進歩し、胆道学はまさに暗黒の時代から輝かしい時代へと変遷してきた。千々岩会長はこのような歴史を踏まえた上で今後の胆道学のさらなる進歩を目指す意図をメインテーマに込めた。胆道疾患の診断・治療には内視鏡的手技の発展で様々なことが可能となり、腹腔鏡手術も積極的に導入され普及してきており、また胆道癌の手術においては拡大肝切除から臍頭十二指腸切除術、さらには血管合併切除再建の併施まで高難度手術も比較的安全に安定した技術でおこなうことが可能になってきた。胆石症や胆道炎、胆道癌に対する診療ガイドラインの作成と臨床現場での運用も大きなトピックである。これらの診断や治療の最先端および胆道疾患全般を網羅する形で主題や要望演題を企画した。さらに医師以外にも看護師や薬剤師、栄養管理士などが参加して胆道疾患に対する多方面からのアプローチをおこなうセッションもおこなった。また、日本胆道学会認定指導医制度の開始にあたり、日本胆道学会認定指導医養成講座も本学術集会から開始した。

本学会ではメモリアル講演として「近藤哲前理事長の遺志を語る」を乾和郎理事長の司会のもと二村雄次先生に御講演いただいた。近藤哲前理事長の胆道癌治療や胆道学発展に対する真摯でひたむきな思い、さらには高潔な生き様が示され多くの会員に感動を与えた。

会長講演では胆道学の黎明期から現在の輝かしい時代までを胆道外科医とともに歩んでこられた千々岩会長が、その足跡を基礎研究から肝胆膵の外

科治療まで網羅して講演された。

特別講演ではCancer stem cellについて、その最先端の知見を森正樹先生に御講演いただいた。大変興味深い内容であり、今後胆道癌に対する臨床応用も期待された。

本学会から開始した日本胆道学会認定指導医養成講座はエキスパートの実技を学ぶという副題の通り、内科系と外科系から8名のスペシャリストにお



会長講演「胆道外科医としての歩み—肝切除から臍頭十二指腸切除まで—」



第一会場風景



学会終了後のスタッフ集合写真

願ひし講演いただいた。認定指導医を目指すベテランのみならず若手医師も多数参加し、各講座とも熱気あふれる教育講演となった。

学会初日の9月16日はあいにくの豪雨となったが、幸いなことに交通機関に大きな支障はなく、無事に開催することができた。学術集会は会員の先生方々のご協力を得て800名を越える参加者を数え、演題数も437題で過去最高となり、盛会裡に終了した。ご支援ご協力を賜ったこと、千々岩会長に代わり御礼申し上げたい。(文責：甲斐真弘)

第48回

日本胆道学会学術集会開催概要

歴
代
会
長

会 期：2012年9月20日（木）～21日（金）

会 場：京王プラザホテル

会 長：滝川 一
（帝京大学医学部内科）

プログラム委員：五十嵐良典、伊佐山浩通、海野倫明、窪田敬一、佐野圭二、
杉山政則、田妻 進、中沼安二、柳野正人、平田公一、真口宏介、
松崎靖司、宮崎 勝

参加人数：847人

演題総数：356題



開催内容

- 理事長講演「胆道学会の現状と課題」
乾 和郎 司会 中澤三郎
正田純一 司会 千々岩一男
- 会長講演「胆汁酸に魅せられて」
滝川 一 司会 牧野 勲
近藤福雄 司会 千々岩一男
- 緊急特別企画「印刷会社での胆管癌発症」
熊谷信二、久保正二
司会 松崎靖司、海野倫明
渡邊五朗 司会 山雄健次
- 日本胆道学会認定指導医養成講座1
1「ERCP, ESTの基本」
良沢昭銘 司会 藤田直孝
伊藤 啓 司会 山雄健次
- 2「経乳頭の胆道ステンティングのコツ」
糸井隆夫 司会 藤田直孝
7「単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術」
森 俊幸 司会 山下裕一
- 3「胆石の種類と成因」
8「胆道癌の外科治療」
塚田一博 司会 山下裕一

開催概要

本学術集会が東京で開催されたのは、2007年に田尻 孝先生が東京ドームホテルで開催された第43回学術集会以来であり、京王プラザホテルでの開催は、2001年に胆道学会がDDW-Japanを離れて、二川俊二先生が単独開催された第37回学術集会以来の11年ぶりでした。学術集会の内容としては、

シンポジウムとして「硬化性胆管炎をめぐる諸問題」と「胆道癌の化学療法の現況」を、パネルディスカッションとして「胆嚢胆管併存結石の治療方針」と「粘液産生性胆管腫瘍の現況と外科治療方針」を、ワークショップとして「再発胆道癌に対する外科治療—適応と成績—」、「胆道の前癌病変の現況」および「胆

道癌のリスクファクター」を、ビデオワークショップとして「内視鏡治療困難例に対する手技の工夫」を取り上げました。また、前回の故千々岩一男会長に引き続き、2011年度より発足した日本胆道学会認定資格制度に向けて、認定指導医講座を設けました。理事長講演として乾理事長に「胆道学会の現状と課題」の講演を、会長講演としては、私がずっと係わってきた胆汁酸研究について、「胆汁酸に魅せられて」というタイトルで講演しました。さらに、大阪の印刷作業所の胆管癌の発生を受けて、「胆道癌のリスクファクター」のワークショップの前に、「印刷会社での胆管癌発症」の緊急特別企画を行い、大阪の印刷会社で若年の胆道癌患者が多発していることを報告した産業医大産業保健衛生学部の熊谷信二先生と、これらの患者さんの何人かを診療した大阪市大肝胆膵外科の久保正二先生に講演をお願いしました。マスコミも興味があったようで、多数の参加がありました。この件に関しては、この学術集会の少し前に厚労省で「印刷事業所で発生した胆管がんの業務上外に関する検討会」が立ち上がり、私も委員として加わり、数回の討議を経て、平成25年3月に大阪の事業所の案件についての報告書を提出しました。発癌機序として、高濃度に暴露したジクロロメタンまたはジクロロプロパンが胆管細胞の glutathione S-transferase (GST) T1で代謝されて発癌物質が形成されるという仮説を立てました。日本人の約半数でこの酵素活性がないので、このような事業に従事した人のGST T1の遺伝子多型を調べればこの仮説が明らかとなります。現在、薬物性肝障害症例でこの遺伝子多型を血液1滴でDNAを抽出

せずに調べる方法で測定しているの、簡単に調べられることを何人かの方々にお話ししたのですが、未だ実現していません。その後も日本各地の労働局から挙がって来る事例の検討を定期的に行っており、その中から全国各地の同様の事例の労災認定を行っています。大阪の事業所と同様に校正印刷を行っていたところが多く、印刷機の洗浄を頻回に換気の悪い所で行っていたのが原因と考えられます。



緊急特別企画会場の報道陣



会長講演会場



学会終了後、医局のメンバーとともに

第49回

日本胆道学会学術集会開催概要

歴代会長

テーマ：『プロフェッショナリズムを求めて』
—Challenge for Innovation—

会期：2013年9月19日（木）～20日（金）

会場：ヒルトン東京ベイ

会長：宮崎 勝
(千葉大学大学院医学研究院 臓器制御外科学 教授)

プログラム委員：五十嵐良典、海野倫明、大塚将之、窪田敬一、佐々木素子、
清水宏明、田妻 進、露口利夫、平野 聡

参加人数：1,039名

演題総数：518題



開催内容

理事長講演「日本胆道学会指導医制度の現況と今後」

乾 和郎

司会：宮崎 勝

会長講演「胆道外科における Challenge for Innovation」

宮崎 勝

司会：跡見 裕

特別講演「Pre-operative Biliary Drainage for Biliary Tract Cancer in India and Its Trends」

Anil K Agarwal

司会：宮崎 勝

特別企画…胆道癌取扱い規約改訂第6版における病理的規約の論点

「胆道癌取扱い規約改訂第6版における“病理学的検索に関する規約”の概要」

柳澤昭夫

「WHO新分類による胆道癌の前癌病変および初期癌病変」

中沼安二

日本胆道学会認定指導医養成講座

1「ERCPの基本テクニックと胆管挿入困難例における対処法」

酒井裕司

司会：神澤輝実

2「胆道疾患に対するEUS、IDUS」

花田敬士

司会：廣岡芳樹

3「膵・胆管合流異常の診断と外科治療」

高屋敷吏

司会：安藤久實

4「肝門部胆管癌に対する右側・左側肝切除の選択」

江畑智希

司会：平田公一

5「拡張・非拡張胆管に対するPTBDの手技」

加藤 厚

司会：島津元秀

6「胆石の成因と疫学」

田妻 進

司会：滝川 一

7「MDCTによる胆管癌の進展度診断」

上坂克彦

司会：今泉俊秀

8「胆道癌に対する化学療法の実状と今後の展望」

古瀬純司

司会：山口武人

開催概要

第49回の本学会は2013年9月19日（木）と20日（金）の2日間千葉県浦安市舞浜のヒルトン東京ベイで開催させていただきました。

胆道学会の前身は胆嚢造影研究会に始まり、その後胆道疾患研究会を経て現在の日本胆道学会となっておりますが我々千葉大学臓器制御外科教室はこの胆嚢造影研究会の第一回を主催させていただいております。その当時の当番会長が千葉大学医学部第一外科（現千葉大学大学院臓器制御外科学教室）の窪田博吉先生が担当されておりました。我々の教室としてはそれ以来48年ぶりの開催でありました。第49回の学術集会のプログラムにおいても様々な外科内科病理放射線科医の皆が一堂に会して討議できる本学会の特徴を出来るだけ活かしたテーマを元にプログラムを選出させていただきました。

学会のメインテーマは“プロフェッショナルリズムを求めて—Challenge for Innovation—”としました。我々胆道学を学び研究し診療に従事するものと

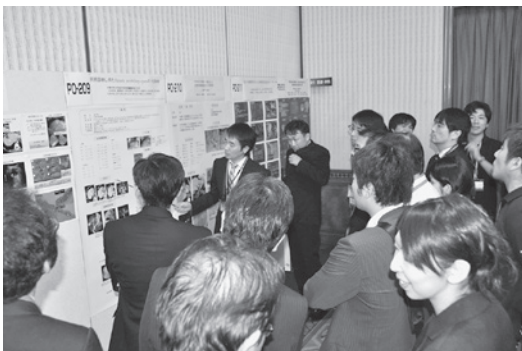
してこの領域の高いレベルのプロフェッショナルリズムを確立して行くためには常に新たな発信を行って胆道病の診療においてInnovationを引き起こし続けて行きたいという思いからこのテーマを付けさせていただきました。会報講演においてこのテーマの意義について独善的ではありますが私見を述べさせていただきました。1000名を超える多くの参加者に参加いただき、また全員懇親会にも大勢の方に参加してもらえたのは主催者として嬉しく思っています。



会長講演
「胆道外科における Challenge for Innovation」



パネルディスカッション1
「胆道癌として外科切除された良性胆管病変の検証—画像・病理所見の対比」



ポスター会場



全員懇親会

第50回

日本胆道学会学術集会開催概要

歴
代
会
長

テーマ：『新たな50年を発展させるために』

会 期：2014年9月26日（金）～27日（土）

会 場：グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミール

会 長：五十嵐良典

（東邦大学医療センター大森病院 消化器内科 教授）

プログラム委員：伊佐地秀司、伊佐山浩通、糸井隆夫、伊藤 啓、海野倫明、金子弘真、窪田敬一、露口利夫、平野 聡、前谷 容、真口宏介、森 俊幸、良沢昭銘



参加人数：1076名

演題総数：440題

（シンポジウム17題、国際シンポジウム12題、パネルディスカッション11題、ワークショップ21題、一般演題379題）

開催内容

会長講演「乳頭部腫瘍の内視鏡診断と治療」

五十嵐良典

創立50周年記念特別企画

特別講演「日本の産業競争力の現状と課題—グローバル化した日産の視点から—」

久村春芳（日産自動車株式会社フェロー/
日産財団副理事長）

「胆道内視鏡医から政治の世界へ」

小松 裕（衆議院議員）

委員会報告「印刷事業に関連した胆管癌」

窪田敬一

「胆石症に関する全国調査」

田妻 進

日本胆道学会指導医養成講座

1「胆石症の診断と治療—エビデンスに基づいて—」

田妻 進

2「胆道疾患に対するUS、EUS診断」

廣岡芳樹

3「硬化性胆管炎の診断と治療—新診断基準の整合性」

大原弘隆

4「胆嚢癌の病理診断」

鬼島 宏

5「胆道癌に対する化学療法の現状と将来」

山口武人

6「胆道癌に対する内視鏡診断」

田中聖人

7「内視鏡的胆道ドレナージ術」

安田一朗

8「胆管癌に対する外科手術」

遠藤 格

主題

シンポジウム

1「肝門部胆管癌に対する診断と治療戦略」

司会：真口宏介、海野倫明 総括発言：宮崎 勝

2「乳頭部腫瘍の診断と治療」

司会：伊藤彰浩、伊藤 啓 総括発言：田中雅夫
国際シンポジウム

「胆道疾患に対するIVE、IVR治療の最先端 Cutting edge of IVE and IVR in biliary diseases」

司会：良沢昭銘、糸井隆夫
パネルディスカッション

「胆道癌における化学療法の役割」

司会：伊佐地秀司、平野 聡

ワークショップ

1「胆管結石に対する効率的な治療選択」

司会：森 俊幸、露口利夫

2「内視鏡下胆道癌手術の現況と展望」

司会：金子弘真、窪田敬一 特別発言：高田忠敬
ビデオワークショップ

「ERCPのトラブルシューティング」

司会：前谷 容、伊佐山浩通

開催概要

第50回日本胆道学会学術集会を2014年9月26日（金）、27日（土）の2日間で、品川のグランドプリンスホテル新高輪の国際館パミールで開催した。伝統のある本学会の第50回という節目の時に、学術集会の開催をお世話させていただきました。

当日は、天候に恵まれ、参加者は1076名と過去最高を記録した。初日で800名を超す参加者があり、会場には人が溢れ、活気のある学会になりました。また演題数も440題と多数の応募があった。

学術集会では、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップなどの主題演題を7セッション企画した。初日の午前中のセッションから満席になり、活発な議論が行われた。また最終日のセッションまで多数の参加者があり、活発な議論が行われた。

国際シンポジウムを1セッション設けて、アジアの先生方を招いて英語での討論を行った。初めての国際シンポジウムであったが、聴衆も多数参加し、

英語での活発な質疑応答が行われた。

多数の応募があった主題セッションにおいては、主題で採用できなかった演題をミニワークショップとして口演で行ったが、多数の聴衆を集め、まとまった質疑応答が行われた。

ポスターセッションは、午前11時から行ったが、司会、演者ともに熱心な討論があり、2日間とも活況を呈した。

展示場のブースには、50枚のパネルを設置し、休憩の合間に50年の歴史を懐かしそうに見られている先生を多数見かけた。また初期の抄録集も展示させていただいた。

50回記念として、「創立50周年記念シンポジウム」を2日目の27日（土）午後に行った。胆道学会設立当時の熱い討論の雰囲気が伝わり、また学会の現状について多数のご意見をいただいた。

特別講演として、産業界から日本の企業の国際化とイノベーションについての講演があった。また政界からの報告として、日本の医療行政の現状についての講演があり、日本の医療の現状と将来についての認識を新たにする講演であった。

26日の夜に50周年記念式典を行った。日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本消化器外科学会、日本肝胆膵外科学会の各理事長から祝辞をいただいた。50周年記念全員懇親会には280名を超える参加者があり、旧交を温めあい、そして歌手BEGINの歌に酔いしれて盛会のうちに終了した。

50回という記念の会を担当させていただき、盛会に終えたことを皆様に感謝いたします。



50周年記念全員懇親会



特別講演 衆議院議員 小松 裕



会長講演